

第5回研究会報告 コメント：前田年昭、及川淳子……(1) / (第6回研究会発表予稿) 靴のない医者と国境のない医者 松本潤一郎……(2) / フーコーによる裁判批判 前田年昭……(21) / 『星火』をめぐる現在——譚蟬雪との会見記 土屋昌明……(23) / (連載) 胡傑監督『星火』字幕(その2) 土屋昌明編……(28)

第5回研究会報告

主体をどこにおいて文化大革命を語るかの論議に

11月26日、第5回研究会がもたれた。

冒頭、例会発表に先立って幹事・土屋より訪中報告があった。訪中時、ドキュメンタリー映画『星火』の胡傑監督のほか、本映画に登場している顧雁さん、譚蟬雪さんに会見したことが報告された(詳細は本号23頁参照)。また譚さんの『求索——蘭州大學右派「反革命集團」紀實』(香港天馬出版、2010年)について、フロアから翻訳の形で日本に紹介すべきだという意見が出された。そして、今後の研究会の進め方、来年の具体的な映画上映やシンポジウムの構想と提案がなされた。出版についての企画内容案も述べられ、版元の勉強出版の堀さんからも意見、スケジュール提案などがあった。

例会発表は、朝浩之による「私にとっての文革」であった。

配布資料

- ・朝浩之「私にとっての文革」
- ・呉念聖「希望は我々に在り——文革下放青年のその後」(『現代の理論』9月号、1984年、15-22ページ)
- ・胡耀邦生誕100周年記念講演会(主催・日中の未来を考える会 / NPO 日中独創メディア)
- ・中国よ、どこへ行く?——『現代中国のリベラリズム思潮』出版記念シンポジウム(主催・明治大学現代中国研究所 共催・藤原書店)
- ・中国インディペンデント映画祭2015(中国インディペンデント映画祭実行委員会)

報告は、会報に掲載の発表要旨および当日追加配布の「私にとっての文革」に沿ってなされた。大学入学前後から始まる中国や文化大革命への関わりが述べられた。当時、毛沢東選集を読み、そこに書か

れていることがリアリティーをもって強く実感できた。紅衛兵に参加した友人から聞いたことなどを報告した。常に中国が、文革が、自分自身の生活の身近な場所にあり、それには暴力の問題が常に付随していたことが述べられた。映画『芙蓉鎮』にもふれつつ、文革は被害者か、加害者かという立場、つまり主体をどこにおいて語るかが重要である。そして、前田が酷評した(『会報』第4号掲載)福岡愛子『日本人の文革認識』について、朝は『日本人の文革認識』は面白かったと評し、福岡氏のような手法(インタビューのスタンス)があってもよいのではないかと述べ、共同通信客員論説委員・岡田充氏が「圧巻は新島淳良評」と批評したところに共感すると指摘した。最後に、改革開放は大きな衝撃であったことや鄧小平はじめとする中国が文革を否定しきれていないとしめくくった。

参加者からの主な意見を以下紹介する。ある参加者は、日本の各世代が中国とどのように関わってきたかを整理する必要がある。そうでなければ、個人の問題意識のみでおわり、かみ合う事ができないだろうとの発言した。別の参加者からは、報告者が文革の負の面を通じて正の面を明らかに、との提起だったがあまり述べられていないので、正の面を聞きたいとの意見があった。また別の参加者は、報告者が「歴史決議」(1981年第11期6中全会)にふれ、何をもって文革を否定したのか、という指摘は大事だと思う。それは、勝ち組が負け組を断罪したということだけであろうし、本質を捉えていないだろうと発言した。歴史決議に対して当時の研究者、知識

【22ページに続く】

第6回研究会(2016年1月28日)発表予稿

靴のない医者と国境のない医者 フランスにおける中国文化大革命受容の一側面

松本潤一郎

序——概要

わたくしは本稿で、いわゆる「1968年5月」前後にフランスで起きた大規模な政治運動に中国文化大革命がもたらした作用の一側面について、アメリカ合衆国の思想史家リチャード・ウォーリン氏による『1968パリに吹いた「東風」——フランス知識人と文化大革命』(福岡愛子訳、岩波書店2014)¹——以下『東風』——の紹介および批評という体裁を通して、報告する。またその際、同書と対照をなす視点から「68年5月(およびその前後)」を論じた、同じく合衆国の比較文学研究者クリスティン・ロス氏による『68年5月とその後——反乱の記憶・表象・現在』(箱田徹訳、航思社2014)²——以下『その後』——を参照する。

本稿の構成を示しておく。先ず『東風』を概観する。次に『その後』を『東風』と対照をなす論点にのみを絞って紹介する。最後にフランスの現状に対する、毛沢東派および「68年5月」の影響について、上記2冊を踏まえた私見を述べる。

——『東風』

「68年5月」は、紆余曲折を経ながらも、最終的には西欧民主主義を寿ぎ、人権を謳う出来事だった。これがウォーリン氏の立場である。「紆余曲折を経ながらも」と述べたのは、彼にとって「68年5月」蜂起の主体は未熟な若者(学生)であり、青年たち

(特に毛派の)は当時のじぶんたちの「やりすぎ」を反省することで大人へと成長または成熟し、フランス共和制の「偉大な」遺産である(とされる)人権と民主主義の価値を再発見し、そこへと回帰していった——というストーリーを、ウォーリン氏は本書で提起しているからである。彼は「序——マオイストへの誘惑」で次のように述べている。「最終的にゴシスト[左翼急進派——引用者]はいくつもの横断的な目的で活動するよりも、人権と、自由意思による社会主義の価値とが、補完的な関係にあることを悟るようになった。結局、一七八九年に人と市民man and citizenの人権を発明したのはフランス人だった。人権のより現代的な装いのもとで、彼らはこの遺産へと回帰しようとしたのだった」(『東風』5頁)。

このようなストーリー化は、「68年5月」以後のマルクス主義的政治の被った歴史的経緯を——それもネガティブな面を強調するかたちで——ふまえたうえで、事後的あるいは遡及的に過去を再構成する操作によって成立している。同書「はじめに」で彼は次のように、みずからの歴史記述の方法について述べている。「というわけで、本書『1968パリに吹いた「東風」』は、何よりも政治的な本である、と私は考える。ニーチェが「好古趣味の歴史」と酷評したようなものを実習したのではない(と思いたい)。むしろ本書は、ヴァルター・ベンヤミンの勧告から方法論上の影響を受けている。歴史家は過去を「本当にあったとおりに」描き出そうとする(というのは、いずれにしろ到底無理な話だが)のではなく、時代や出来事を、その事実性あるいは現在との妥当

1 Richard Wolin, *The Wind from the East, French Intellectuals, the Cultural Revolution, and the Legacy of the 1960s*, Princeton University Press, 2010. 以下、同書からの引用は日本語訳版から。

2 Kristin Ross, *May '68 and Its Afterlives*, Chicago University Press, 2002. 日本語訳版は同書全体に加え Ross, 'Managing the Present', in *Radical Philosophy* 149 May-June, 2008, 2-4. を訳出している。以下、同書からの引用は日本語訳版から。なおフランス語訳版 Kristin Ross, *Mai 68 et ses vies ultérieures*, Éditions Complexe, 2005. を参照した。

な関連性を目指して「現実化」すべきだ、という勧めである。ベンヤミンの見解においてこの意味は、「歴史の平板な流れのなかから特定の時期に発破をかけるために——その時期から特定の生を、あるいはその生きる営みのなかから特定の営みを、発掘するために」過去を解釈するのが歴史家である、ということだ。ベンヤミンは「今一時」という観念を指標または基準として用い、「メシア的な出来事の休止」という理論的概念と結びつけた。政治的なメシア願望のはなばなしい失敗の相続人として、われわれの政治的規準は、逆に内在的で世俗的で、合意に基づいた民主的なものでなければならない』（『東風』vii-viii頁）。毛沢東主義をも含めたマルクス主義的政治のネガティブな面——特にソルジェニーツィンが告発した（とされる）ソ連「全体主義」やポル・ポト政権下の虐殺——のみを経てきた「現在」なるものを設定したうえで、それらへの反省に立った「現在」から、「時代や出来事を、その事実性あるいは現在との妥当な関連性を目指して「現実化」す」ということである。このような見解——彼のベンヤミンの読み自体が疑わしいがそれは措く——は、現在または現状を肯定し、さらには現状を変革する志向を過去あるいは歴史から消去して、何もしてはならないと主張するに等しい。過去または歴史を学ぶ意義が、現在のようにしか歴史はならず、現在が必然であり運命であるということを確認すること以上のことではなくなっている。すでに述べたように、この視点は「68年5月」以後の歴史的経緯を踏まえた視点から事後的に過去を再構成する操作によって成立する。どのような歴史記述もこの操作的な面を免れない。が、ウォーリン氏の場合、この操作を通じて、現在・現状を肯定・正当化するためにのみ、過去をいわば動員しているため、看過することはできない。

本研究会の趣旨に沿った報告から外れてしまうため、歴史記述の方法そのものについては、これ以上、ここでは述べない。ただし、このような現状肯定に

のみ過去を動員・利用・収奪する史観に対しては、イギリスの労働史家エドワード・パーマー・トムソンが『イングランド労働者階級の形成』（1963）序文で述べた、次の言葉が投げ返されるべきであると思われる。「私は、貧しい靴下編み工や、ラダイトの剪毛工や、「時代遅れ」の手織工や、「空想主義的」な職人や、ジョアンナ・サウスコットにたぶらかされた信奉者さえも、後代の途方もない見下しから救い出そうと努めよう。彼らの熟練と伝統は死に絶えつつあったかもしれない。彼らの共同社会主義的理想は幻想であったかもしれない。彼らの反乱の謀議はむちゃであったかもしれない。しかし、こうした激烈な社会的動乱の時代を生きぬいたのは彼らなのであって、われわれではない。彼らの熱望は彼ら自身の経験からみれば正当なものであった。だから、彼らが歴史の犠牲者だったというのであれば、彼らは自らが生きた時代のなかで犠牲者だと判決をくだされたから、いまもなお犠牲者なのである。／ある人間の行動がそれにつづく進歩の見地から正当化されるか否かをもって、われわれの唯一の判断基準とすべきではない。つまるところ、われわれ自身が社会的進歩の果てににいるわけではないのである。敗北を喫したとはいえ、産業革命期の人びとの大義のなかには、こんにちなお正されなければならない社会悪への洞察をみてとることができる」³。この言葉は18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリスの労働者の歴史を辿った仕事におけるものであるが、本稿の文脈とも無縁であるとは思えない。

いずれにせよ、この視角からウォーリン氏は、1960年代後半から1980年代前半までのフランス知識人の挙措を、当時のフランスにおける歴史的・政治的・社会的・経済的背景を紹介しつつ、彼らにとっての文化大革命がどのようなものであったかに注目しながら、追ってゆく。具体的には、毛沢東主義諸派（主にUJCMLとGP）およびジャン・ポール・サルトル、ミシェル・フーコー、いわゆるテル・ケル派に属すフィリップ・ソレルスとジュリア・クリステ

3 エドワード・P・トムソン『イングランド労働者階級の形成』市橋秀夫・芳賀健一訳、青弓社、2003年、15-16頁。文中に出てくるジョアンナ・サウスコット(1750-1814)は、同書に付された訳注によると宗教育家であり、新約聖書「ヨハネの黙示録」12章に現れる女性は自分であると主張していたという。わたくしに彼女を嘲笑することはできない。

ヴァ、アラン・バディウ、新哲学派（ヌーヴォ・フィロゾフ）らがとりあげられる。

参考までに『東風』の構成を示しておく。同書は二部から成っており、第一部「造反の時」では、フランスにおける毛沢東主義の動向が四つの章（その成立経緯・経過および1960年代フランスの概況と「68年5月」の梗概）で辿られた後、末尾「余談——アラン・バディウのセクト的マオイズムについて」でバディウの政治的立場が批判的に論じられる。「余談」とされ、また批判的ともなるのは、バディウが〈じぶんたちのやりすぎに反省して第三世界主義に懲り懲りした挙句に西欧型民主主義の価値を再発見する毛沢東主義者〉という、ウォーリン氏が示す本書の図式には収まらないからである。第二部「知識人の時」では5章から7章で各々サルトル、テル・ケル派、フーコーがとりあげられ、8章「文化大革命からアソシエーションのデモクラシー」において、わたくしが前段落で述べた民主主義—人権擁護的転回に68年5月の意義はあるという同書の結論が述べられる。

議論をかたんに紹介してゆく。第1章「ブリュエ＝アン＝ナルトワの決戦」では1972年4月6日、ノルマンディ地方の鉾山町ブリュエ＝アン＝ナルトワで起きた殺人事件への毛派の介入が紹介される。殺害されたのは労働者階級の女性ブリジット・ドゥワヴル。容疑をかけられたのは地元の名士ピエール・ルロワで、犯罪が行われた当日朝、現場近くで彼の乗用車が目撃されたことがその根拠となった。しかし裁判では証拠不十分でルロワは釈放される。この事件を「ブルジョアが労働者階級の一人を殺す、責めを負わされることはない、犯人は刑罰を免除されて釈放される」（『東風』28頁）というパターンの踏襲と見た親中派プロレタリア左派（GP）の活動家たちにとって、ルロワが犯行を起こしたことは明白であり、彼らは司法をも含めたブルジョアジーの自己免罪とこの事件を捉え、もはや司法に裁きを委ねるのではなく、人民自身によってこの事件を裁くべき

であると主張した。いわゆる人民裁判の要求である⁴。この要求はかなえられていない。また今日なお、犯人は捕まっていない。

この逸話を第1章でとりあげたウォーリン氏の意図は、例えば次の言葉に窺われる。「無謀な左翼は、ブルジョア的「正常性」にかわって共産主義の定義する「正常性」を採用するというリスクを犯した。その結果生まれた「正しい思考」の個人は、当のブルジョアの単なる二番煎じにしか見えないだろう。5月後の時期、フランスの左翼は、弁証法的唯物論の厳格な信条を、対抗文化が求める「悦ばしき知恵」（ニーチェ）と和解させることなど不可能だ、と悟った。／そのようなジレンマに強いられて、かなりの数の確固たるGPの活動家が、揺るぎない人権擁護者になった。彼らは左翼の過剰さを直に経験し、自分たちが見てきたものに恐怖を覚えて怯んだ。一九七〇年代及一九八〇年代に栄えた人権主義のエートスは、たとえ意図せざるものだったとしても、ゴシスト経験の主要な結果のひとつだったといえよう。[……]ブリュエ＝アン＝ナルトワは、左翼の政治的正しさを試す小実験室となった。まもなく左翼に走る断層線が全面的にさらけ出され、ゴシズム〔左翼急進主義——引用者〕の妄想が解体され始めた。「大衆路線」というマオイストの教義に忠誠を保ちつつ、GP指導部は、真実は大衆とともにあるという立場を貫いた。彼らはサルトルに反対して、民衆の正義が規則や手続きといった形式上の障害にあうなら、「住民側の正義の自然運動」は致命的な妨害を被るだろう、と主張した。その結果、「大衆の外側にある」フォーマルな司法装置が優勢となるのだった」（『東風』39-40頁）。「何年もの間マオイストは、国内政治について信じられる選択肢が少ないのを補うために、オルタナティブな政治的現実を構築しようと奮闘した。こうしてGP指導部は、幻想的で終末論的なプロレタリアートのイメージを、「歴史の謎に対する解」（マルクス）として作りあげてきた。ブリュエ＝アン＝ナルトワのヒステリックな興奮と

4 『東風』(33頁)では人民裁判に反対するミシェル・フーコーの議論を引いている。ブリュエ＝アン＝ナルトワ殺人事件に先立つ二年前、GP幹部ピエール・ヴィクトール（後にサルトルの「秘書」を務めることになるベニ・レヴィ）らとの討議においてフーコーは、人民裁判は司法による暴力の再生産にしかならない、裁判という制度形態そのものが正義を变质させてしまう装置であるからという趣旨の議論を展開している（『人民裁判について——マオイスト（毛沢東主義者）たちとの討論』（1972年2月5日）『ミシェル・フーコー思考集成IV規範／社会』所収、菅野賢治訳、筑摩書房1999、305頁）。

混乱のさなか、そのような幻想はもはや維持できないことが証明されたのである」(『東風』41頁)。人民裁判を左翼の「妄想」「幻想」として一蹴する彼の見解の背後には、労働者階級／ブルジョア階級というマルクス主義の対立図式が1968年前後には失効していたという認識があり、ひいては、だから「68年5月」に労働者の運動を含めてはならず、それはあくまで「若者」または「学生」の運動であったという主張が控えている。

そしてこの自説を補強するために、第2章「60年代のフランス」が後に続く。彼はそこで次のように述べている。1960年代以後、「労働の構造的変化と豊かな社会の魅力とが相まって、伝統的なマルクス主義の階級闘争観が古くさくなった。『さらば労働者階級』とは、一九八二年にアンドレ・ゴルツが行った研究のタイトルだが、フランス左翼の退場を適確に要約したものである。プロレタリアートがもはや革命的変革の主体として現実味のないものになったとすれば、マルクス主義は意味を失ったのだ」(『東風』52頁)。しかしこの「構造的変化」には、これと矛盾する傾向が共存していたと彼は言う。それがフランス行政制度の旧体質である。「フランスの組織生活を支配している心情としては、相変わらず序列重視で、おまけに参加型の意味決定を著しく嫌う傾向が重なった。その結果、行政エリートとその部下たちの間には、見るからに埋めようのない溝ができた」(『東風』57頁)。この矛盾した共存が「68年5月」の主要因であるとウォーリン氏は考える。したがって「68年5月」は旧来の階級闘争図式では捉えられない。むしろそれは日常生活に浸透してくる行政権力による抑圧および権威に抗うライフスタイルおよび文化の変革であるということになる。文化の革命——ここに中国文化大革命がフランスの政治的・社会的状況に流れ込む素地が形成されたと彼は考える。「ゴシスト〔左翼急進派(訳者註)]が政治的に嫌ったのは、レーニン主義及びそれと対を成すスターリン主義、トロツキズム、マオイズムだった。それらは左翼権威主義の形態であって、それが労働者自治をめざして奮闘する左翼運動のライバルを何度もつぶしてきた、と彼らは見ていた。同時に、異文

化間で観念が移り変わるという皮肉のひとつとして、日常生活批判は、つまるところマオイストの文化大革命概念と併合されることになる。重要なのは、この概念の融合は、正統派マルクス主義の敬虔さとは裏腹に、文化的なテーマは解放闘争の正式な対象だという考えを推し進めるのに役立った」(『東風』62頁)。先ほどの引用とは異なって「ゴシズム」という言葉が肯定的意味で用いられている。が、この曖昧さについては、今は措き、彼がこのようにフランスにおける文革の意義を理解している点のみ確認しておく。

そしてこの観点から、第3章「68年5月——リビドーの政治の勝利」で「68年5月」が論じられることになる。とりわけ同月13日に行われたデモンストレーション(旧左派とは異なる複数の小集団の大規模な結集という逆説的事態)に、ウォーリン氏は「68年5月」を象徴させている。「その週末、学生リーダーたちは月曜日に大規模なデモを行うと発表した。共産党も参加して学生たちと歩調を合わせることに同意した。コーン＝ベンディット、ジュスマール、ソヴァジョとの三者連立体制でデモ行進を率いることを、認めたのである。それは何とすごい行進だったことか。最も信頼のおける推定によると、三十万人が参加したのだ! 小集団の時機到来だった。それにふさわしくデモに同伴した横断幕のひとつには、皮肉な調子で「われわれは小集団」と書かれていた——が、今回は何十万という数から成る小集団だったのである」(『東風』100頁)。またウォーリン氏は「68年5月」の特徴と彼が見做す「反独裁主義や労働者の自己管理という潮流」(『東風』103頁)の先駆としてブルードンを挙げたうえで、「68年5月」における学生の蜂起——ウォーリン氏にとってそれは大学の解体ならぬ「改革」(『東風』82-83頁参照)である——に(労働者と連帯しない、みずからの階級性に無自覚な運動であるという理由で)批判的だった(とウォーリン氏が理解する)マオイストと対照させている。そして同章末尾では、「68年5月」を「先進工業社会における社会化の基本力学を較正しな**こ**うそとしたもの」(『東風』116頁)、彼自身の言葉で言いかえれば「意図されたのは、「革命的」というより、

むしろ「改革派」的なものだったのだ』（『東風』9頁）と総括する⁵。これが彼の「68年5月」である。

以上をふまえて第4章では、「68年5月」に乗り遅れた（とウォーリン氏が捉える）フランス毛沢東主義が本格的に考察される。まずは当の中国文化大革命の特徴が挙げられる。毛沢東主導による中国共産党政権が世界的注目を浴びた一因としては、そのソ連との対立（中ソ論争）があり（『東風』118頁）、また革命の主体を労働者だけでなく、貧しい農民たちにも担わせた点が考えられるという（『東風』121頁）。その一環として学生たちに農村で実地に学ぶことを「強制」し、その過程で知識人や党幹部が紅衛兵に激しく批判・攻撃された（『東風』119頁）。この「階級意識」による〈いきすぎ〉または〈やりすぎ〉を、ウォーリン氏はフランス革命時のロベスピエール率いるジャコバン派にもロシア革命時のレーニンにも共通する「主意主義」であると断定し、そのうえでこの「大衆路線」と「革命的前衛主義」の間の動揺を文革のダイナミズムと見做して、このダイナミズムが他国のマルクス主義者に世界的にもたらした衝撃を、「第三世界主義」と呼ぶ（『東風』121頁）。

ウォーリン氏が言うように、労働者とは異なる政治的主体の可能性を農民に見いだした点に中ソ論争のポイントの一つがあるとすれば、毛沢東とレーニンを同一視するのは無理がある。この場合、革命の担い手が異なることになり、ウォーリン氏の当初の立論に反している。またジャコバン派による独裁は革命——ウォーリン氏が愛好する近代的人権と民主主義の始点（！）——を護るために不可避であったという側面もあり、これとレーニンや毛沢東との同一視は不可能である。が、こうしたウォーリン氏の議論の不整合性については、今は措く。注目しておきたいのは、当時の西欧では、この革命を担う政治的主体（化）が、経済的下部構造からではなく、むしろ下部構造から相対的に自律した上部構造（い

わゆる「文化」）の水準において出現しようというふうに文化大革命が捉え返された——とウォーリン氏が理解している点である（『東風』121頁、130頁）。フランスでは高等師範学校の学生の一部が第三世界論に触発されて毛沢東主義を自認して組織をつくり（UJCM）、1960年代半ばから活動を開始する⁶。活動の一つに、文化大革命における農村への学生の下放に想を得たと思しい、工場潜入経験がある。すでに述べたようにウォーリン氏は、「68年5月」を階級闘争とは捉えないため、学生と労働者を連結させようとするこのような試みを最初から軽蔑しているふしがある（特に『東風』137-150頁）。遅ればせながら「68年5月」の衝撃に気づき、その渦中に入っていった毛派活動家たちの工場潜入をこのようにとりあつかうことは、彼らに対する二重の侮辱であるように見える。が、それについては、今は措く。UJCMから分派したのがすでに述べたGP（1968年9月）であり（『東風』146頁）、本稿註4で触れたGPの幹部ピエール・ヴィクトールは後にサルトルに接近することになる。この点については第Ⅱ部第5章「ジャン＝ポール・サルトルが完璧なマオイストだった瞬間」で論じられることになる。ともあれウォーリン氏にとって毛派が「68年5月」においてはたした意義は以上のようにネガティブなものであり、これと対照させるようにして、第四章の終わりで彼はフェミニストや同性愛者の運動に言及する（『東風』150-164頁）。「68年5月」の意義は、毛派のように労働者を考慮する「古い」立場よりも、むしろこちらにあったのだと強調するためにこれらの運動を引き合いにだしているかのごとくに、である。第4章の題辞に読まれる「リビドー」は精神分析用語の「欲動」を意味しており、ウォーリン氏が「68年5月」を、性的なそれをも含めた欲望の解放、さらには消費社会謳歌の起点と位置づけていることがわかる。

第Ⅰ部と第Ⅱ部の間に、本書の蝶番のように置か

5 ウォーリン氏は「68年5月」は革命ではなく改良だったという自説を補強すべく、ローラン・ジョフラン『68年5月』（1988年、改訂版2008年。日本語訳版はコリン・コバヤシ訳、インスクリプト2015）を引いている（『東風』365-366頁）。ジョフラン『68年5月』については『週刊読書人』第3113号（2015年10月30日付）掲載の拙評を参照されたい。

6 ウォーリン氏は高等師範学校の学生が毛沢東主義化する契機の一つとして高等師範学校教員の哲学者ルイ・アルチュセールによる影響を論じているが（『東風』127-130頁）、その行論は複雑に入り組んでいるため本稿では紹介しない。当時、高等師範学校の学生でアルチュセールの「弟子」であった毛沢東派ジャック・ランシエールによる『アルチュセールの教え』（1974）市田良彦他訳、航思社2013および『平等の方法』（2012）市田良彦他訳、航思社2014を参照。

れたパートが「余談——アラン・バディウのセクト的マオイズムについて」である。すでに述べたように、文化大革命を今日なお肯定・擁護するバディウの立場は、本書でウォーリン氏が組み立てたストーリーには回収不可能であり、そのため「余談」となっている⁷。バディウはUJCMMLでもGPでもPCF内毛派でもなくUCF-MLという組織で活動していた(『東風』168頁)。ウォーリン氏はバディウをアルチュセールの影響を受けた理論偏重主義者と見做している(『東風』169頁)が、このような観点はむしろ、ウォーリン氏自身が指摘しているように(『東風』168-169頁)、バディウの思考がつねに、自然に発生してくる運動に分け入りつつ、その只中で当の運動を批判し、鍛錬し、ときに分岐してゆく——バディウにとって「一を分けて二と為す」という毛沢東の言葉はそのような意味を持つ——スタイルであるということの一面を捉えているにすぎないと思われる。このようなスタイルは容易・安易に運動の現状に合流するものではないため、ときに日和見主義とも理論主義とも見られかねないのは確かである。また、このように運動に対してつねに批判的でありながら、かといって単純に切り捨てもしないというスタイルのゆえに、或る意味ではつねに「正しい」位置に居続け、理論的には永久に「勝ち」続けることができると言えなくもない。ウォーリン氏のバディウ論に見るべき点があるとすれば、このような視点を抽出しうるかもしれないということであろう。

第II部では「68年5月」がフランス知識人にもたらした衝撃が論じられる。すでに述べたように劈頭の第5章ではサルトルがとりあげられている。ウォーリン氏によるならば、1960年代におけるいわゆる構造主義の席卷によって、サルトルのいわゆる実存主義も、彼がみずからの思考の糧としていた現象学も、過去の遺物と見做された(『東風』183頁)。「実存主義をマルクス主義と融合させよう」(『東風』188頁)としていたサルトルが構造主義によって失墜したのも、階級闘争を遠ざけようとするウォーリン氏

からすれば当然であろう。とはいえウォーリン氏は構造主義に一方的に与するでもなく、その失墜したはずのサルトルが「68年5月」以後、復権したと論じていく。この復権の契機の一つが毛沢東主義である。1970年3月、GPの機関紙『人民の大義』が警察によって任意押収され、編集者ジャン＝ピエール・ル・ダンテクとミシェル・ル・ブリが逮捕される。弾圧に抗すべくGPはサルトルに『人民の大義』の名義上の編集発行人となるよう依頼し、サルトルはこれを引き受ける(『東風』205-206頁)。これにより『人民の大義』は存亡の危機を免れた。また同じくGPの活動家アラン・ジェスマールが逮捕された際にも(同年秋)、サルトルは毛派機関紙『すべて!』の名義上の責任者を引き受けている(『東風』207頁。なおサルトルはさらにもう一つの毛派機関紙『私は告発する』の名義上編集責任者も引き受けているが省略する)。これらの出来事によって、サルトルは学生たちの圧倒的的支持を得たという(異なる逸話だが『東風』198頁を参照)。

サルトルは毛沢東主義との連携において復活した。しかし彼は毛沢東思想を全面的に支持していたわけではなかったとウォーリン氏は論じている。1967年、サルトルはポーヴォワールとともに文革のさなかにあった中国を訪れ、幻滅して帰国したという(『東風』209頁)。それではなぜ彼は毛派活動家を支持したのか。ウォーリン氏は次のような答えを与えている。「彼は何よりも、マオイストの革命的熱情を讃えた。ヨーロッパの労働者階級が自己満足と無気力にとどまっている時代に、GPの活動家たちは、そうでもなければ消え失せたであろう反乱の気概を、保つことができたのだ」(『東風』209頁)。労働者との連携を図った毛派とはなく、「革命的熱情」と「反乱の気概を、保つことができた」活動家たちを、サルトルは支持したとウォーリン氏は考えていることになる。言いかえれば、「反乱の気概」と「革命的熱情」さえあれば、どのような運動であれ、原則的にサルトルは支持しただろうとウォーリン氏は考えていることになる。かくして毛派との協

7 そもそもバディウは「文化大革命期」を、中国共産党の公式見解(1965-1976)——そしてウォーリン氏も明言することなく、この見解を無批判に採用している——とは異なり、1965年11月から1968年7月までと理解しており、議論が成立しないのは当然とも言える。アラン・バディウ「最後の革命?」松本潤一郎訳、『俾』第四号、白順社2010年所収を参照。

働という、ウォーリン氏からすればスキャンダラスなサルトルの姿勢は、このように理解されることで、そのスキャンダルを消去されたかに見える。

これに加えて「知識人」のジレンマがあり、サルトルはこれを解消する契機として毛派と接触したかのごとくにウォーリン氏は述べている。「サルトルは、円熟の域に達した二十世紀のフランス知識人だったが、その役割については極めて居心地悪く感じていた。一方で知識人は、普遍的価値の唱道者だと主張する。他方では、そのような価値を現実生活において実現するには無力のままだ。この溝、あるいは裂け目が、知識人の存在の核心を苦しめる。それによって知識人特有の「不実」の説明がついた。サルトルはマオイストにコミットしたことで、知識人の役割に全く新しい光をあてて見ないわけにはいかなかった。この先もう知識人は、大衆の外部に立つ絶対者を体現し続けるわけにはいかななくなるだろう。それを止めて、「人民の友」となるのだ」(『東風』184頁)。サルトル自身、1971年10月17日付『ニュー・ヨーク・タイムズ・マガジン』誌のインタビューに答えてこう述べている。「われわれは、私は一九四〇年から一九六八年まで左翼知識人〔ゴシュの知識人——訳者による注〕で、一九六八年以降は急進左派知識人〔ゴシスト知識人——同前〕になった、とすることができる。その違いは行動にある。急進左派知識人とは、知識人であるということで免除されるものは何もないと悟る者のことである。彼は行動において、自分の特権を捨てる、あるいは捨てようとする」(『東風』220頁より再引用)。このサルトルの言葉を引いた後、ウォーリン氏は次のように述べている。「『知識人の擁護』(一九六六年)——いわゆる「東京講演集」——のなかでサルトルは、知識人という職業の矛盾性を強調した。一方で知識人は、善良なドレフュス派流に、善や正義や真理といった普遍的価値と結ばれようとする。それでいて同じように、階級社会の歪みのために一貫してそのような価値の実現を妨げられる。／一九七〇年頃、サルトルはマオイストに関わったことで、知識人という職業をもう一度再評価させられた。サルトルの結論は、左翼知識人は普遍的な志を抱きながら、

職業上の個別主義により現状への忠誠を余儀なくさせられるという矛盾を解決できない、ということだった」(『東風』220-221頁)。この知識人の「矛盾」を解消したのが「68年5月」であったとウォーリン氏は考える。彼にとって「68年5月」は、平等をめざす経済的階級闘争から、諸個人の自由(人権と民主主義)をめざす文化的闘争への軸移動を象徴する出来事だからである。軸移動の主要因には左翼政治の抑圧的性格があると考える彼は、次のように述べている。「共産主義者と運命を共にすれば、政治的に利するところがあった。世界は、一方に労働者階級とその代表たち、他方にブルジョア、という善対悪の勢力にすっきり分けされた。しかし5月の出来事の余波のなかで、ゴシズムがフランスの政治イメージを支配するにつれ、どうやら左につくということの意味が急落したようだった。反乱の激情的側面——政治闘争としての、そして祝祭としての革命——は、社会主義の意味が根本的に変わってしまったことを示唆していた。もはや革命とは「生産手段の社会化」のことではなかった。歴史的経験から判断して、新たな形の抑圧を生むだけの方法だとわかったのだ。ラディカルで「文化的」な新しい要求の数々が出現するにつれて、反乱の主旨や意味合いが劇的に変化した。フェミニスト、ゲイの人権活動家、囚人、移民などがこぞって、自分たちの要求の認知を迫るために宣伝効果のあるスポットライトを捜し出した。一九七〇年には、GPの一部が枝分かれして「革命万歳!」を結成し、方向性として、常時リビドーの政治的要求を追求するマオイストの労働者主義を放棄した」(『東風』223頁)。ここでは先の引用と打って変わって「リビドー」という用語が否定的に使われているが、その点については、今は措く。ウォーリン氏にとって「68年5月」が、彼をも含めた知識人の矛盾を(いっけん)解消してくれた出来事であったと映っている点を確認しておく。彼はこの図式にサルトルをも回収しようとしていると言ってよい。

だがもう一点、ウォーリン氏にとってスキャンダルと思われる問題が、サルトルにはあった。サルトルによる暴力の「肯定」である。サルトルは暴力を、

被抑圧者がとらざるをえない抑圧者に対する対抗的手段である限りにおいて正当化した（詳細は割愛する）。これをウォーリン氏は「ロベスピエールの亡霊」と呼び、先述した〈いきすぎた主意主義〉と同一視したうえで、サルトルによる暴力の正当化を批判する（『東風』213-218頁）。そのうえでウォーリン氏は、晩年のサルトルが先述したGP元幹部のピエール・ヴィクトールことベニ・レヴィを私設秘書にしたという事実を挙げ、明言はしていないものの、あたかもこの事実によって、晩年のサルトルがかつての暴力肯定を自己批判したかのごとくに読みうる行論を進めている（『東風』特に235頁）。というのは、レヴィはGP崩壊後、毛沢東主義を離れ、ユダヤ教の思索（タルムード研究）の方へと関心を移動させていったからである（『東風』228-230頁）。ユダヤ人という〈他者〉の形象（『東風』236頁）——ホロコーストを想起されたい——は、1970年代後半から80年代にかけて、新哲学派によって倫理的なものの象徴として、ソルジェニーツィンとともに称揚されることになる（『東風』230-234頁。「国境なき医師団」もこの文脈で評価されている）。平等から自由へ、政治から倫理へという軸移動を「68年5月」に見てとるウォーリン氏は、レヴィとの晩年のサルトルの交流を、彼の図式を補強する素材としているかに見受けられる。

第6章「文化—政治地獄のなかの『テル・ケル』」では『テル・ケル』主幹のソレルスとクリステヴァの動向が主に辿られている。彼らの政治的立場の変遷は目まぐるしく複雑なため、その詳細はここでは追わない。一つだけ述べておくと、本書におけるウォーリン氏の記述が正しいとすれば、或る意味でテル・ケル派の活動は、今日なお見られる、言論界においてみずからのラディカリズムなるものを強調しておきながら、メディアの外には何ら波及しない言説を生産している人びとに口実を与え続けているのかもしれないという印象を受けた（特にクリステヴァを重点的に論じた『東風』251-265頁など）。彼らによる中国の美学的称揚（『東風』275-278頁）やサルトルを批判する芸術至上主義的立場表明（『東風』241頁）、社会革命と記号論を同一視する立場（『東風』259頁）——この点には検討に値する面も少しある——など

もこの印象を強めると言わざるをえない。また本書に引かれているアメリカ現代芸術に対するクリステヴァのコメント——アメリカの芸術家が無意識に表現しているものを私たち（テル・ケル派？）が言語を使って意識化するのだといった趣旨の発言——を見ると（『東風』288頁）、先節で触れた、新哲学派から「国境なき医師団」に及ぶ、民主主義的人権擁護派の発想——権力の犠牲となった「物言わぬ」「弱い」他者を西欧が救済する——と似ていてのではないかという印象も、抱かざるを得なかった。

第7章「フーコーとマオイストたち——バイオポリティクスとアンガージュマン」（本書「はじめに」x頁によると、この章をウォーリン氏は友人のロン・ハースと共同執筆している）では、フーコーの思考に毛沢東主義が与えた衝撃が論じられている。なおフーコー自身は「68年5月」にはチュニジアにいたため、この出来事をじかに経験してはいない。ウォーリン氏によると、フーコーが行ったGIP（監獄情報グループ——1971-1972の間、刑務所内の状況を調査する目的で結成された）の活動は、GPに触発されていた（が、記述は曖昧である。『東風』306-308頁）。「政治」概念を階級闘争だけではなく、様々な社会的制度の権力作用——このとき「権力」という概念も従来とは異なる意味をもつようになる——を把握するために拡張させる動きの先駆として、ウォーリン氏はGIPの活動を捉えている。彼はGIPの歴史的意義について、次のように述べている。「こうして、一九七〇年代初期にフランスの知識人の間で病院、刑務所、救護院、精神病院が、全く新しい政治的重要性と意味を帯び始めた。ゴシストの間では、政治論争という観念が再考され再定式化された。階級は、政治闘争の始めから終わりまでを占める主要素ではなくなった。それに代わって、GIPの経験から自然に生まれ出たものとして、政治にふさわしい目的は語る権利を奪われていた人々に声を与えることだ、という人民主義的な考えが定着した。政治活動の新しい目標は、これまで組織的に周縁化され排除されてきた人々に発言の余地を与えること、しかも彼らを擁護するのが政党や労組、そして彼らの代弁者と思われた「預言的知識人」だった頃には、明ら

かに不可能だったやり方でそれを行うこと、となった」(『東風』315頁)。このようにウォーリン氏は、「政治」と「権力」概念の拡張——これを彼はフーコーの提起した、いたるところに遍在してどこまでも浸透してゆく「生権力」概念と結びつけて理解している(『東風』332-333頁)——を人権擁護思想の成熟と位置づけ、フーコーを新哲学派の先駆と見做す(『東風』347-351頁)。また先述したサルトルの「普遍的知識人」に代えて、フーコーが「特定の知識人」を知識人による政治参加(アンガージュマン)の新たな型として提起したとも述べている。「特定の知識人は、現代社会に溢れている権力の網の目の外に立つことを拒否する。そのかわり、その網の目の内部で戦略的に働く。マオイストの工場潜入のように、特定の知識人は、権力と闘うにあたり、その権力と直に接する人々の「ローカルな知識」を回路づけることによって闘う。フーコーが説くには、「大衆は知識を得るのに彼[知識人——記者による註]を必要としない。彼らは錯覚に惑わされることなく充分にわかっている。知識人よりはるかによくわかっており、そして確実に自分の言いたいことは自分で言える」のだ(『東風』313頁)。くりかえし批判されていたはずの毛派の「工場潜入」が、ここでは換骨奪胎されて用いられている。これをウォーリン氏による篡奪と呼ぶか不整合と捉えるかどうかは、今は措く。ここではウォーリン氏のみならずをも含めた知識人のジレンマを払拭するために、サルトルのみならずフーコーを、さらには「68年5月」をも引き合いに出しているのではないだろうか。また、フーコーを人権擁護派の先駆と見做す延長線上で、1981年のポーランド連帯に関してフーコーがフランス政府に対して、この件に干渉するよう求めるロビー活動を行っていたとか、「国境なき医師団」に協力していたといった文言も読まれる(『東風』347頁)。そしてこれらフーコーの活動を可能にした「68年5月」における文革の重要性を強調するために、「なぜ5月後の時期に毛沢東の文化革命という観念が、学生急進派と深く共鳴し合ったか」という問いに答えるかたちで、次のように述べている。「伝統的なマルクス主義思想において文化は常に、社会の社会経済的基

盤をおぼろげに映し出す付随的なものとみなされてきた。逆に毛沢東の文化革命の教義は、「下部」構造と「上部」構造とをつなぐ因果関係の矢印は、逆方向もありうる、と仮定したのだ。文化は革命闘争本来の正当な中心を意味した。ゴシストはまだ、プロレタリア革命が社会主義社会を生み出すための必須条件だと信じていた。労働者をその究極の結末に備えるべく、彼らは工場での組織化を続けた。他方、毛沢東に倣って、ブルジョアの価値観や社会習慣を一変しないことには社会主義の実現はありえない、とも信じていた(『東風』334頁)。「ブルジョアの価値観や社会習慣を一変しないことには社会主義の実現はありえない」——ここだけをとってみればすばらしい文言であるが、すでに述べた文脈の中でこの言葉が発されていることに想到するとき、ウォーリン氏は己を免罪するために「68年5月」を利用しているのではないかという、先に述べたわたくしの疑念が回帰してくる。が、今は措き、最終章に移る。

第8章「ありえない遺産——文化大革命からアソシエーションのデモクラシーへ」では、ここまで述べてきたことが簡略にまとめられている。曰く、1960年代におけるフランス労働者の中産階級化(『東風』359頁)に伴う、伝統的マルクス主義者の労働者偏重の失効(『東風』363頁)、それに代わる反管理運動と「内なる植民地化」批判としての「68年5月」、多様な市民の多様な解放としての「68年5月」(『東風』363頁)である。「68年5月」以降の人びとによる結社(「アソシエーション」)の増大は、産業社会からポスト産業社会へのシフトの指標であり、プロレタリア革命やブルジョアの市民権獲得やテロリズムとは異なる革命が「68年5月」だった(『東風』368頁)。「68年」は新しい「個人主義」の誕生を意味しており、「国境なき」革命であり(『東風』369頁)、そして「国境なき医師団」は「5月の運動から直接生まれたのだった」(『東風』374頁)。題辭に読まれる「ありえない」という形容詞は、明言されていないが、「予想外の」「不慮の」という意味で使われているようである(『東風』364頁)。「68年5月」は奇跡のような出来事だった、ありえないことが起きた、という理解である。この点は、7章の次の言葉からも察せられる。「しか

し68年以前は、フランスで革命が起こりうるとは、あるいはフランス本土自体が再び世界革命の震源地になるとは、誰一人思ってもみななかっただろう。ナンテールの戦鬨的急進派の何人かが、ド・ゴール主義を打倒しかねない反乱に火をつけることができたなら、恐らく5月の時期に有名になった落書が呼びかけたとおり「不可能を求める」ことも無理ではなかっただろう。伝統的な左翼への夢から醒め、労働者階級にも組合指導部の改良主義的傾向にも幻滅して、5月後の時期に多くのゴシストが、それまで触れられずに来た革命の可能性を活性化するために、社会のなかで周縁化された人々と運命を共にすべきだと感じた(『東風』334-335頁)。ここでいわれる「革命」が、8章で言われる「フランス的アソシエーション〔フランスではNPO的な市民団体をさす——訳者による註〕生活の復活」(『東風』366頁)である。かくして本書は「68年5月」を、歴史的に断絶した一回限り空前絶後の奇蹟として、言いかえれば不可能を可能にした革命として、言わば神秘化することで閉じられる。

二——『その後』

次に『その後』を、『東風』との対照を際立たせる論点的に絞って、瞥見する。そのために、先ず『東風』における「68年5月」の捉え方を6点にまとめておく。すでに見たようにウォーリン氏は(1)「68年5月」を歴史的な脈から切り離された奇蹟と捉える。これに付随して(2)「68年5月」の主体は「若者(学生)」だった。したがって労働者はその主要な担い手ではなかった。(3)「68年5月」は「世代」論的なものだった。(4)「68年5月」は産業社会から消費社会への移行を示す指標だった。その結果、(5)「68年5月」以降、毛派を中心とする活動家たちは、当時の「いきすぎ」または「やりすぎ」を反省して、抑圧的全体主義に抗う人権擁護を軸に据えた西欧型民主主義の価値を再発見した。これに伴い、争点は政治的・経済的平等というよりはむしろ、文化的自由へと移動したとされる。また——この点

をウォーリン氏は明言していないが、おそらく暗黙に——(6)「68年5月」はパリで起きたという点を自明として、『東風』の議論は展開されている。

以上6点に対照させるかたちで、『その後』を読んでゆく。とはいえその前に先ず、『その後』のモチーフについてかんたんに触れておく。同書の大きな主題は、「68年5月」がその後どのように継承されていったのか、言いかえれば、この出来事がいかに編集・整序されて後代に記憶されていったのか、したがって、どの側面を消去・忘却するように仕組まれているのか、の解明にある。ただし注意すべき点は、『その後』が実証主義的に「真実の68年5月」あるいは「ほんとうの68年5月」といったものを暴き出す作業に捧げられているわけではないということである。もちろん、ただちに付け加えておかなければならない。ロス氏は膨大な資料を綿密に読み込み、「68年5月」を「その後」の経緯とともに精緻に描き出そうとしている。そして同書はその描出を見事に行っていると、わたくしには思われる。それではなぜ、このたいへんな労力を注ぎ込まれて描きだされる「68年5月」を、彼女は「真の68年5月」として提起しないのか。彼女にとって——そしてわたくしにもこの点に触発されている——、「68年5月」とは本質的に、人びとが社会的に割りふられた諸々の「役割」、例えば学生や労働者や農民といった社会(学)的に同定可能な「本質」または自己同一性を逸脱して、経験交流を行った場面だからである。脱本質を本質とする出来事を、「真実」として提起することはできない。それは再びこの出来事を社会(学)的に同定し、人びとを各々の位置に固定させ続けることだからである(『その後』12頁)。そしてこの同定と固定の操作を行ったのが、主に新哲学派と呼ばれる人びとであり、上記6点のいずれもがこの操作に係わっている。本稿の最後でわたくしは、この操作の帰結としてのフランス共和制の現状について、かんたんに触れる。ともあれ『その後』のこうしたモチーフを手離すことなく、ウォーリン氏の議論に対照させるかたちで同書からいくつかの論点をとりだしてゆく。

第一点の「68年5月」を歴史的経緯から切り離し

て奇蹟的出来事と捉える視点を批判するにあたって、『その後』が注意を促すのは「アルジェリア戦争」(1954-1962)である⁸。このときポリス——「国家」をも「警察」をも意味する広義の取り締まり装置——が人びとにふるった暴力は、国家への国民の同一化の機制に亀裂を走らせ、自己同一性にずれをもたらした。この経験が、取り締まり装置を批判する「68年5月」に注ぎ込んでいないはずがない。そしてこの「アルジェリア戦争」と「68年5月」の結びつきこそ、取り締まり装置が最も消去してしまいたいものである。ロス氏は次のように述べている。「六八年五月」とは、巨大な文化改革でも、現代化の推進力でも、新しい個人主義の幕開けでもなかった。対象とする期間を大きくとることで、こう主張することが可能となる。「五月」とは、まずもって社会学のカテゴリーでいう「青年」の反乱ではなく、ある歴史的条件下で発生した、労働者と学生による同時反乱だった、と。参加者のなかには、幼少時のアルジェリア戦争の生々しい記憶を持つ人もいれば、一〇代後半かそれ以降の時期が、一九六一年一〇月一七日にモーリス・パボン率いるパリ警察が行ったアルジェリア人労働者数百人の虐殺や、シャロンヌ事件、OAS(秘密軍事組織)が連日のように行った襲撃事件に偶然重なった人もいた。かれらは同年代だったわけでも、こぞって同じ政治遍歴をたどったわけでもない。だがアルジェリア戦争の終盤では、ドゴール政権による警察権力の行使のありようをみな目の当たりにしていた。「六八年」が、その数年前に起きたアルジェリアに関わる一連の出来事と時間的に遠くないという事実こそ、八〇年代に作り上げられた公認の物語が最初に忘却してしまいたい、きわめて重要な「六八年」の一面だったのである⁹ (『その後』56-57頁)。「68年5月」を不可能なことが起きた奇蹟と捉える視点は、このようにして国家装置への加担を意味することになる。

いま引いた箇所からもすでに部分的に明らかだが、

第二点の「68年5月」を若者(学生)の反乱と見做す視点への批判に移る。このような視点が、すでに見た「68年5月」の〈いきすぎ〉または〈やりすぎ〉への反省から西欧民主主義の価値の再発見へ(未熟な子どもの大人への成熟)というウォーリン氏によるストーリー構成において重要な役割をはたすことは、想像がつく。だがロス氏はこのようなストーリーに抗うべく、『その後』において次のように述べている。「五月」のあいだ、そしてその後も、大学教授からは学生活動家が「反知性主義」的であり、「読書文化」への敬意を欠いているとの批判が聞こえてきた。しかしかれらは、大学図書館や教科書からは知的文化を導き出すことはなかつたろう学生たちが、ジョワ・ド・リールやラルマッタンなどのマイナー書店に通うことで、現に一つの知的文化を生み出しつつあったという事態を見過ごしていた(『その後』168頁)。その傍証としてロス氏は、ニコラ・ドームによる「68年5月」の活動家たちへのインタビュー集『パリの片隅の革命家たち』(1998年。2008年に増補改訂版『六八年五月——無名の語り手たち』として再刊)に収められたドゥニーズの次の言葉を引いている。「一九六〇年代の知的活動の熱さは今からは想像できない。それは当時の表現を使うなら、スターリン主義批判や、民族解放運動への支援と結びついていましたから。あのときは『アルギュマン』や『ソシアリスム・ウ・バルバリ』など雑誌がいくつもあった。『レ・タン・モデルヌ』や『エスプリ』だけの時代ではなかった。自分のちっぽけな政治文化は大きく変わって行って、理論的考察の必要性がますます痛切に感じられたんです」(『その後』169頁)。またロス氏は映画監督ウィリアム・クライン(1928-)によるドキュメンタリー作品『革命の夜、いつもの朝』(フランス/カナダ1968)に言及しつつ、「当時のドキュメンタリー映画が拾った「五月」の街頭での何げない会話に耳を傾けてみれば、一九六〇年代の学生は粗暴で無教養だというステレオタイプはただちに

⁸ なお「アルジェリア戦争」という言葉でこの事象を呼ぶことがフランス議会で正式に認められたのは1999年である。それまでのこの事象は「名前のない戦争」「危機」「和平工作の試み」「事変」「秩序維持作戦」「治安(ポリス)行動」などと呼ばれていた(『その後』101-102頁)。アルジェリア独立がフランスにとってどれほどの衝撃であったかが窺われる。

⁹ シャロンヌ事件は1962年2月8日パリの地下鉄シャロンヌ駅周辺で起きた事件。OASに抗議する人々のデモ集会を警察が攻撃し、参加者のうち9人が圧死した(『その後』86-87頁)。OAS(1961年1月-1962年)はアルジェリア独立に反対する極右非合法軍事組織。独立を認めたドゴールの暗殺計画などで知られる。

消え失せる」と述べている（『その後』169頁）。このような「ステレオタイプ」はまた、「みすばらしい活動家のライフスタイルというステレオタイプのイメージ」とともに、「活動家のその後の証言に当時の主要な記憶としてきわめて鮮明に表れる、ひとつの情動を抹殺あるいは無視している。フランスのように徹底的に区分された社会では、いかなるコミュニケーションであれ——体制転覆に関わるコミュニケーションがそうであることは当然だが——区分横断的なコミュニケーションがなかなかうまくいかない。こうした社会にあって、社会的な境界線をただ乗り越えるだけでも時折感じられる快樂こそが、この情動のことなのである」（『その後』202頁）。そして「その後」に「抹消あるいは無視」されることになる、このような「知的活動の熱さ」または「快樂」「情動」の配備に寄与したのが、毛沢東理論であり、そして第三世界主義であったとロス氏は指摘している。その枢要は、人びとが「労働者」や「農民」「学生」といった、取り締まり装置によって社会（学）的に割りふられた自己同一性を逸脱し、「自己と、自己とは異なる集合的他者性とを軸として、植民地の人々という〈他者〉への答えのない、あるいは不可能な同一化を経て形成された」「政治的主体」（『その後』156頁）の経験にある。「アメリカ合衆国と、すなわち第二次世界大戦以降のアメリカによるグローバルな政治的文化的支配と闘うことで、ベトナムは反帝国主義と反資本主義という二つの主題の統合を可能にした。理論的正当化のおおまかな根拠は毛沢東主義が提供した。いわく、あらゆる革命家は同一の闘いに参加している。つまりフランスの労働者、北ベトナム人民、そしてフランスの学生までもが同一の敵、帝国主義的資本主義と対峙しているというわけだ。こうして毛沢東主義は初めのうち、フランス「共産」党（フランスの毛派はこう表記することもあった）の古めかしいプロレタリアート中心主義を、別の政治的主体（小作農や自作農など）が持つ可能性を認めることで突き崩していった。毛沢東理論はまた、第三世界主義に基づいた世界の地政学的組織化を「南北」の軸——国際労働分業論が際立たせる軸——に沿って補強した。階級闘争は、西側で

はその存在を間近に感じる機会が断続的にしか訪れなかったが、国際的なレベルでは、帝国主義本国と新植民地主義国とのあいだに、すでに存在しており、つねに発生していた。毛沢東の中国は、ソ連が裏切った革命的社会主義の公約が第三世界で復活していることの証左だった」（『その後』156-157頁）。ロス氏はこうした知的活動を支えた出版社をいくつか紹介する文脈で、「当時の左翼主義の大きな特徴の一つ」として、「理論そのものがヨーロッパではなく、第三世界から立ち上がりつつあるという考え方だ。行動する人物像、自由を求める戦闘的な農民兵が第三世界的現象のひとつだけではなかった——それならば、結局のところ、ヨーロッパ人と西洋人が頭を使い、残りの人々は体を使うという標準的な国際分業体制の想定内だ。そうではなく「地に呪われた者」である毛沢東、ゲバラ、ファノン、カブラルらが、左翼主義的な転倒というこの時代では思想家にもなっていたのだった」（『その後』164頁。アミルカル・カブラルはポルトガル領ギニアの民族独立運動指導者。1973年、暗殺された）。個人主義的な自由ではなく、社会（学）的身分を逸脱する「区分横断的なコミュニケーション」がもたらす平等への集合的「情動」が「68年5月」にはあった。個と集団を対立的に捉える感性そのものが「68年5月」のこのような側面を消去する。というよりはむしろ、逆にこのような側面の消去によって、個と集団を対立的に捉える区分——消費社会に相応しい主体——が構成されるのだろう。ロス氏は先に引いたドーム『パリの片隅の革命家たち』から別の活動家アデクによる「われわれは人々に支えられていた。ゼネストが起き、あらゆる人が運動に参加していたのだから。誰もが知・情動・感覚の限界を超えたところで生きていた。自分の彼岸にいたのだ」（『その後』197頁）という言葉を引き、「ここでいう「彼岸」こそが、自分ひとりという意味での「一」ではなく、自分と他者との関係としての「一」であり、未決定かつ不可能なたちで個人と集団の同一性と他者性とをまとめあげる「一」である。[……] 人称代名詞の「私」には複数形はない——「われわれ」とは「私」の複数形ではない、まったく異なる別のものなのだ」（『そ

の後』197-198頁)と述べ、さらに、「一九六〇年代に多くの人々は次のことを自覚した。真に革命的な集合的経験を通して生まれるのは、顔のない、あるいは名を持たない群衆や「大衆」ではなく、存在の新たな段階 […] なのである。そこでは個性が集団性によって消去されずに補完される。これは今や次第に忘れられつつある経験である。そしてその痕跡はすさまじい勢いで復活するあれこれの個人主義によって組織的に一掃されつつある」というフレドリック・ジェイムソンの言葉を引き(『その後』199-200頁)、個と集合性が非対立的様態を強調している。これが「68年5月」の核心とも言うべき平等の経験を支える感性である。「そうした状況の克服がもたらす快楽は、当時の都市部での社会的分割の厳しさに比例して存在していた。分割線を横断して行われる対話から伝わってくるのは、将来的な見返りではなく、今この場で体験される実に直接的な変容の感覚だ」(『その後』204頁)。平等の経験は、この「直接的な変容の感覚」に支えられている。ロス氏は「平等」についてこう述べている。「権力の問題系に注意が向けられたこと〔「68年5月」を権力奪取の失敗と捉えるレイモン・アロン(ウォーリン氏はアロンを評価している)らの見解がもたらした効果を指す——引用者註]で、「五月」において、より一般的には一九六〇年代文化において問われていた一連の問題が消去されている。まさに政治的な問題としてまとめる平等という問いだ。ただしここでの「平等」とは、地位や収入、役割の「平等」といった具体的な意味でもないし、契約や改革に建前として存在する「平等」の力学のことでなければ、はっきりした要求や綱領としての「平等」のこともない。闘争のなかで現れ、主観的に裏づけられ、いまここで、あるべき姿としてではなくあるがままの姿で、明確に示され、経験されるものことである。こうした経験は「国家権力の奪取」の傍ら、そうした物語の外に位置している」(『その後』145頁)。平等の経験は、例えば呼び間違え、不適切な名前として現われる。学生を「学生」、労働者を「労働者」、農民を「農民」と呼び続ける限り、言いかえれば社会(学)的に「適切な」名前で呼び続ける限り、平等の感覚は生まれ

ない。ロス氏は「68年5月」に出現した「私たちはみなドイツ系ユダヤ人だ」(ダニエル・コーン＝ベンディットを指す)や「私たちはみな暴徒であり盗賊である」(政府権力による運動参加者への形容を運動側が転用したもの)といったスローガンに、このような文脈から、「不適切な名を引き受けてしまえば、その名前は社会学的には定義できないある集団を表すことになるのである。[……] 政治と抗争を自然主義的ではないかたちで定義する。「盗賊」は他者に対する関係を、言説によって構築する——ランシエール〔アルチュセールの弟子であった哲学者——引用者註]ならば、これもまた「不可能な同一化」と呼ぶだろう。二つの、しかしそのどちらも引き受けることのできない同一性のあいだに開いた裂け目、あるいは隔たりで活動する政治的主体である」(『その後』212頁)と注釈を与えている。そして、ウォーリン氏が侮蔑したのとは対照的に、毛派による工場潜入の試みや1967年に開始した調査活動(労働者や農民に話を聴きに行くこと)を、そうした平等の経験として捉えようとする(『その後』212-221頁)。

この平等の感覚を隠蔽さらには消去するために、個の自由をもたらす消費社会の到来の指標として「68年5月」は再構成される必要があった。その戦略的操作の一つが、第三点の「68年5月」を世代論的に捉える視点である(主に新哲学派に帰する)。しかしすでにアルジェリア戦争の記憶に即して見てきたように、この出来事に参加した人びとの年齢は様々であった。ロス氏は世代論にこの出来事を還元しようとする議論の危険性について、次のように述べている。「その意図は「世代間闘争」や「切断」という概念をめぐってはっきり現れている。すなわち新しい「一九八〇年世代」の名のもとでの普遍主義的理想の復古、あるいは正統性の回復のことだ。こうした理想は民主的な共和国を動かすうえで不可欠でありながらも、ルノーとフェリー〔『68年の思想』(1985年)の著者たち——引用者註]好みのジャーナリストティックで市場受けする語彙が「懐古趣味的」あるいは「時代遅れ」とはっきり描く旧世代が見捨てたものだった。そしてまさにここにこそ、かれらの試みにひそむ矛盾が最も明確に現れている。そう

マシュレ〔アルチュセールの弟子であったマルクス主義哲学者——引用者註〕は指摘するのだ。なぜなら「世代には世代なりの考え方がある」という考え方に内在する、暗に歴史主義的な前提を普遍主義的と呼ぶことは不可能に近いからだ。もし仮にそうならば、思想は、継承も伝達も一切抜きで生起することになってしまうし、世代間にとどうしても断絶が存在するために埋めることのできない溝が生じることになるからだ(『その後』379-380頁)。このように、社会的分業を横断して連結する人びとのあいだの線を断ち切る装置として世代論が機能する危険性が指摘される。そのとき、「五月」後の収集と懐柔によって挫折し、立ちすくみ、愕然とした人々——近代が前進することを受け入れられなかった人々、失速してしまったものをなんとか維持する行為と、自分たちがあれほど断固拒否し、打倒を目指した社会に戻ろうとする試みのあいだで冷酷にも引き裂かれた人々——が経験した自殺や鬱状態(『その後』386頁)もまた不可視化され、あるいは消去される¹⁰。

第四点の「68年5月」を消費社会到来の指標と捉える視点もまた、この消去に加担している。すでに述べた「世代」「若者」といったカテゴリーもマーケティングの標的として人びとを捕捉し且つ「68年5月」の「大衆」的性質がもたらした恐怖の再来を防ぐ装置であるが(『その後』402-403頁)、ここでは「68年5月」そのものを消費の対象へと商品化する戦略についてのロス氏による分析をとりあげる。ロス氏はメディア(ジャーナリズム)が回想-再構成する「68年5月」の特徴として、特定の活動家を「英雄」に仕立て上げることによって運動の集合的性質を分解し、その力を散逸させる効果を挙げている。これにより、「68年5月」が「若者」(特に毛派)に促したとされる「自己反省」あるいは「自己批判」が(そのような「英雄」たちにのみ)可能となり、先述した人びと(時代に背を向けた人びと)の存在は無視される。この操作を批判的に分析したアナキスト系雑誌『赤と黒』に掲載された次の記事(1969)を

ロス氏は引いている。神話化としてのスター・システムの「人格化」の操作が、すでに68年5月直後から行われていたことがわかる。〔ブルジョワジーは——ロス氏による註〕極限まで人格化を行う。この方法が結果的には割に合うのを知っているからだ。ある人々にとって、悪とは学生による犯行に限られる。ここで学生とはナンテール〔「68年5月」の起点とされるパリの大学——引用者註〕の学生だけを指す。そしてナンテールとは三月二日運動〔同じく「68年5月」の起点とされる学生デモ集会——引用者註〕のことであり、この運動体はコーン=ペンディット〔三月二日運動主導者の一人。周知のように、後に「68年5月」を象徴する人物へと神格化されてゆく——引用者註〕一人のことになる。他方で、労働者のストライキとは権利を要求しているにすぎないと考える人たちがいる。ここで労働者とはCGTのことで、CGT〔フランス労働総同盟——引用者註〕とはセギ〔書記長——訳者註〕のことだ〔…〕。これでは議論は生まれない。一方は冒険主義的なユダヤ系ドイツ人に狂信的に追従し、他方では「指導部」の指示に肅々と従うからだ。これでは学生と労働者が交わることがない。肉体労働と知的労働の分割を堅持しようという話にしかないからだ。だがいつだってこんなものだったのではないだろうか(『その後』389頁)。このようにしてブルジョアジーは歴史を消去し、分業と専門化をいっそう強化させてゆくことになる。「68年5月」を少数の英雄の物語や世代論として語ることは、この強化への加担を意味するだろう。また先述した「自己批判」についても、ロス氏は68年当時の活動家ギー・オッカナムによる批判(かつての同志が1970年代半ば以降、続々と「反省」し転向していくことへの批判)に触れ、この場合「自己批判」が「自己肯定」と化している点を指摘する(『その後』318頁)。ウォーリン氏はこの点に無自覚である。

第五点は、この一見ラディカルな「自己批判」の裏に潜む「自己肯定」に係わっている。この操作を

10 ロス氏は、このような人びとの経験を見事に捉えたドキュメンタリー映画作品として、ジャック・ヴィルモンと映画高等師範学校の学生たちが製作した『ヴァンデル社工場の操業再開』(1968)および同作で描かれていた人びとを探し求めるエルヴェ・ル・ルー監督『撮影再開』(1995)を論じている(『その後』267-277頁)。

最も洗練させた形で行ったのが、すでにくり返し述べてきた新哲学派——順不同に挙げればアラン・フィンケルクロート、ベルナル＝アンリ・レヴィ、アンドレ・グリュックスマン（元毛派）など。また哲学者ではないが、彼らと同じ立場と言ってよい、元毛派で「国境なき医師団」創設者の一人ベルナル・クシュネルなど——だからであり、彼らは人権擁護派として1970年代後半からフランス言論界を席卷するようになるからである。ロス氏は彼らの挙動を詳細に分析しているが、ここでは全体主義というレトリックと人権擁護の逆説の二点についてのみ、見ておく。

まず、あらゆる革命は全体主義化するという彼らの主張の（ナチスによるユダヤ人のホロコーストと並んで）論拠の一つとされるソルジュニツィン『収容所群島』（フランス語訳刊行1974）について、ロス氏は「実は『収容所群島』はフランス語以外の言語に翻訳され、それぞれの国——たとえばアメリカ、ドイツ、イタリアで——で紹介されたものの、フランスのような反応も起こさなければ、メディアで大きく取り上げられることもまったくなかった。なぜか。その答えは、すでに示唆したように、新哲学派が「六八年五月」の記憶に決着をつけるよう迫られていたこと、つまり政治に関わる当時の議論と行動の総体を、遠い過去に葬り去られた巨大な集団幻想の表現に変えるよう迫られていたことに求められる」（『その後』334頁）と指摘する。『収容所群島』は彼らの言説の補強に用いられたということである。またこれと係わって、彼らと同じレトリックを用いて反第三世界主義論を展開したジャック・ジュイヤーの議論（1978）をロス氏は紹介している。それによると、「アフリカの社会主義はすべて全体主義的社会主義だ」。つまり一方には自由と文明を享受する西洋世界があり、もう一方では誰もわれわれのような生活をしていない場所、つまりグラグ〔収容所——引用者註〕があるという。ジュイヤーは新哲学派好みの予言的な物言いもする。そして（さまざまな「時代遅れのドグマ」の）「終焉」と（「民主主義」や「市場」、「倫理」、この場合では「人権」の）「復活」を自信ありげに予言する。予言的な物言い

のメリットは、陳述的なものと行為遂行的なものとの区別をはっきりさせないでおくこと、つまり新たな世界を記述することと、今の世界を指図したとおりにするための処方箋を提示することを同時に行う点である。アフリカの、そしてすべての（さらなる拡大！）第三世界における社会主義は「全体主義的」（「専制的」「嗜虐的」には至らなくても）であり、必ずそうなる^とジュイヤーは記す。こうした気の滅入るような不可避性——新哲学派の言説が陽気さで知られたためしは一度もない——を踏まえれば、ヨーロッパ左翼の唯一の任務は、全体主義的な国民国家によって抑圧された個としての民衆を支援するため、第三世界の「政権」を糾弾することであり、「人権インターナショナル」に結集することである」（『その後』312頁）。また反第三世界主義論を、心理学の導入によって補強したパスカル・ブリュックネール『白人の嗚咽』（1983）——そこではファノンが愚弄されている——もこのような左翼の人権擁護への移行に一役買っているという（『その後』314-317頁）。心理学化とは、具体的には政治を「弱者」「被抑圧者」「全体主義の犠牲者」への道德感情や同情といった倫理に置き換える操作を指す。

いずれにせよ、すべての社会変革の試みが「必ず」抑圧的となるという彼らの主張は、裏返せば「何もするな」という現状肯定のニヒリズム（シニズムか）を意味することになる（『その後』331頁）。それだけでもすでに問題を含んでいるのだが、何もしないならまだしも、さらにはクシュネルらが創設した「国境なき医師団」による人道主義的介入の危険性が指摘される。「こうして第三の変化、すなわちフランスの知識人が第三世界という「他者」と結ぶ関係の変化が争点となる。それは政治から倫理への撤退というかたちをとる。一九六〇年代前半の第三世界主義は「他者」との政治的関係の帰結である。そこでの政治的関与——他者の思想と希望をすすんで受け入れる態度——は、自分がフランス国家や共産党などに抱いた一体感をかたがえして支えた忠誠の体系や類型と袂を分かたつこと、あるいはそこから切断することに基礎を置いていたからだ。しかし新たに成立する他者との倫理的関係のほうは、アイデンティテ

ィ——西側とその価値観の、また受難者に関する職業的代弁者たる知識人のアイデンティティ——の強化、いや肥大化に基礎を置いている。受難者は、人道的犠牲者の表象に関する現行制度の内部では、定義上発話が不可能であり、美学とマーケティングの高度に重層決定された論理の枠内でのみ可視化される存在だ。この新たな関係には、救出という準軍事的行動や、危険地帯への医師団——クロード・リオズユによれば「白衣の特殊部隊」——の緊急派遣が含まれる。突然やってくる医師は植民地での先達にあたる落下傘部隊と往々にして見分けがつかず、人道主義的な口実の裏には、第三世界の「紛争地帯」での救援活動の持つ、一見そうは見えない植民地主義的性格がときに潜む。リオズユの表現はその様子を浮き彫りにしてくれる。ヨーロッパ中心なモラリズムを念入りに強調するところから、今述べたような、資本の拡大という新植民地的な動きに踏み出すまではほんの一步でしかない、いや一歩もないかもしれないのだ（『その後』327頁）。ウォーリン氏はこの点に無自覚である。

いずれにせよ、マルクス主義批判と収容所の言説のメディア上での巧みな使用によって、新哲学派は（一見ラディカルな反体制派としての）みずからの権力を確かなものとした（『その後』347頁）。これに付随して「68年5月」は倫理的あるいは精神的な革命だったという言説をばひこらせつつ（『その後』344頁）、「新哲学派は自らの支配の妨げとなる分割〔階級闘争——引用者註〕をただ隠蔽し、分業体制——それがはらむ階層構造の一切と、民衆の能力を制限するために組み込まれた仕組み——を肯定するという結論に達する」（『その後』348頁）。これが民主主義の価値を再発見する契機としての神話化された「68年5月」である。

最後に「68年5月」をパリに限定する理解への批判を見ておく。ロス氏は「68年5月」の立役者として学生のみを指定する言説への批判と相即して、この出来事を地理的に限定する見解にも反対している。「パリの街頭に当てはまることは、他のどこにでも当てはまった。いや実際それ以上だった。ナントやレンヌ、またあらゆる地域で、大勢の学生と労働者、そして多くの場合は農民も参加した街頭占拠

が、パリよりも長いあいだ行われたのだ。クレルモン＝フェランとグルノーブルでは五月六日に、青年労働者と失業者が学生に合流した。またトゥールーズの五月七日のデモでは、街頭に出た学生と「非学生」つまり労働者が渾然一体となっていた」（『その後』142頁）。パリ中心史観を脱中心化するこの視点は、社会（学）的自己同一性からの逸脱を核心に置いて「68年5月」を捉えようとするロス氏の一貫した姿勢の一つの現れとも言えよう。

結——靴のない医者と国境のない医者

以上、大雑把にはあはれ、『その後』を、『東風』との対照において紹介してきた。『その後』が提起する「68年5月」像は、今日を生きるわたくしたちにとっても、意義深いと思われる。最後にその点に係わって、もう少しだけ議論を続けたい。

先節はじめてわたくしは『その後』のモチーフにかんたんに触れた。「68年5月」がその後どのように継承されていったのかという問いは、「68年5月」をいかに記述するのかという問いにも連なってゆく。ウォーリン氏や新哲学派のように懺悔すべき過去としてではなく、歴史を別の方向に伸びてゆく可能性を含んだ線として捉えること、本稿の報告の文脈に沿って言いかえれば、文化大革命からフランスの人びとが触発された情動の一側面を、未来へと肯定的に捉え返すようにして記述する作業が、そのような課題の一つになるだろう。この課題は、わたくしがウォーリン氏の『東風』の方法論に関して対抗的に引いた、トムソンの言葉が指し示してもいる課題であると思われる。『その後』には次のような言葉がある。トムソンの思考と無縁であるとは思えない。ここは、ロス氏がしばしば援用するジャック・ランシエールが1975年から1981年まで創っていた雑誌『論理的反乱』——執筆陣は「68年5月」の衝撃を受けて、労働者の歴史をいかに記述するかを大きな課題としていた——を、同じく「68年5月」を承けて民衆史を主題として創刊された『フランスの民衆』

誌(1971-1980)との比較を通して紹介するという文脈である。『フランスの民衆』は民衆の様々な歴史(地域別・主題別など)を実証主義的に事細かに記述してゆくスタイルを是としていたが、『論理的反乱』はこのスタイルに批判を行なうという関係にあった。ややもすれば『フランスの民衆』は、社会(学)の同一化と同様の操作を「民衆」に関して行使しているということである。「したがって『論理的反乱』は、『フランスの民衆』のような雑誌が代表する試みの総体を中心的な批判の対象とする。前者にとって後者は、左翼内部に存在し、自分たちが解体を目指す経験主義的で実証主義的な傾向を隅々まで体现する存在だ。『フランスの民衆』の試みとは、細々とした事象の集積にすぎず、既知の事柄についての知識を増やすことでしかない。そして最終的には、社会的諸条件を扱う歴史家——過去を扱う社会学者——は、事態が根底から違っていたかもしれないという発想を排除してしまう。そうした人々が労働者階級に向ける賛辞には、もう一つのまったく異なるメッセージが隠れている。すなわち、集団としてのアイデンティティに忠実であれ、自分の場所を離れるな、労働者のように振る舞え(つまり自分たちが労働者ならこうすると考える通りに振る舞え)というメッセージだ(『その後』252頁)。これは有体に言うならば人権擁護派と同じ立ち位置である。自分が想像した他者に同一化したうえで、当の他者にもこの同一化を強いているということにもなりかねないからである(ランシエールは本稿註6で触れた『平等の方法』において、このような姿勢を、左翼による歴史の篡奪として批判している)。実際に『フランスの民衆』掲載論文の全てがそのような志向を有していたかどうか、また『論理的反乱』がこのような陥穽に他ならぬ自分たちがはまっていなかったかどうか、この点についてはここでは述べられない。それこそ残された検討課題である。ただ、本研究会の趣旨に沿って言うならば、「事態が根底から違っていたかもしれないという発想を排除」してしまうような歴史研究を文化大革命に関してわたくしたちが

続けている限り、文化大革命の経験から肯定的な線を見つけたし、その線を未来へと伸ばしてゆく作業は困難を来たすであろうことが予測される。

そして第五共和制フランスの現状をみるならば、より具体的に言いかえるなら1月のシャルリ・エブド襲撃事件と11月の同時襲撃事件に挟まれた(?)2015年のパリをみるならば、ランシエールも批判する歴史の篡奪を含めたフランス(新)左翼——オランド大統領を擁する現社会党政権もその一部である——の欺瞞がこのような事態を招いたことの一因であることは明らかである。この欺瞞に、ここまで見てきた「68年5月」の「その後」における再構成過程も含まれることは言うまでもない。また人道的介入の名の下にアフリカや中東地域に対する軍事展開を強めてきたここ数年の政治動向に鑑みるならば、フランスが「テロリズム」の標的となったのも、或る意味では当然であると言わざるをえない面がある¹¹。そしてこのような動向に加担する方向で1970年代後半以後、言論界を動き回った新哲学派の人びとの言説もまた、このような事態を引き起こした一因である。フランス毛派の一部に淵源する「国境のない医者」たちがIS的なものを生産してきた——そう言っても過言ではない局面が確かにある。そしてロス氏のような歴史記述作業を通して、フランス毛派の経験の現状とは別の仕方での継承が少しでも為されていたならば——「たら」「れば」話はうんざりだという向きもあるだろうが——、別の線が未来へと伸びていたかもしれない。そのような経験の継承があったならば、ISに先進国の若者たちが入り込むこともなかった。そう思わずにはいられない。それゆえ『その後』から、『東風』が称揚する〈国境のない医者〉と対照をなす、〈靴のない医者〉、すなわち「はだしの医者」の形象を引いて、本稿を終えたい。ロス氏が紹介するこの形象から、〈もう一つの文革〉へと伸びる線を抽出することができるかもしれないと考えてのことである。長くなるが引いておく。「六八年」以前、左翼政党は移民をあまり話題にしなかったが、理由の一つは移民に選挙権が

11 鶴飼哲「みづから播いた種」——二一世紀のフランスの変貌『現代思想』第43巻20号、2016年1月臨時増刊号、青土社2015所収を参照されたい。

ないことだった。一九六四年に開設されたナンテール校の機能主義的なキャンパスの一角はパリ郊外で最悪の移民スラム地区であり、学生たちは不均等発展がいかなるものかを「生きた」経験として肌身に感じていた。それは、とりわけアンリ・ルフェーブルが飽きずに繰り返していた「六八年五月」の最大の「原因 [=大義——訳者註]」である日常経験のことだった。ナンテール校の学生たちは、新キャンパスでの授業に出席するため毎日スラムを横切らなければならなかった。しかしできたばかりのキャンパスの前できびすを返し、周囲の移民スラムに入る選択をした者は決定的な一歩を踏み出した。極左組織は五月から六月にかけて、移住労働者がまったく新たな表現や表象、運動を展開する触媒となった。七〇年になると、家賃不払い運動やハンガー・ストライキといった「六八年五月」以前には見られなかった集団的な闘いによって、移民は国家機構と直接対峙するようになっていた。「五月」に続く少なくとも一〇年間、極左組織はこうした行動との連帯が実現するうえで、貴重な媒介の一つとなった。／ここに見られたのは逐語主義とユートピア主義との特異な混交である。「逐語主義」とは、理論や労働組合による媒介に一切阻まれることのない、労働者との直接接点に基づくこと、そしてまた実践的に構築された理解を強調することを指す。他方「ユートピア主義」とは、とりわけ毛派にとっては、知的労働と肉体労働との区分が今後消滅すると考え、区分自体がすでに消滅しているかのように生きることだった。またここには、中国文化大革命に由来する「はだしの医者」という人物像が、過剰な思い入れを寄せられて、「ベトナム人兵士」という人物像と負けず劣らず重要な役割をはたしていたことも見てとれる。この「はだしの医者」という人物像の役割は、おそらく次の意味で逆説的なものだったと言えるだろう。まずおおむね幻想に基づく関係——中国で起きている現実の事態について経験的知識がほぼ皆無の状態でも確立された関係——がある。そしてその関係性が、フランスで毛派を名乗る人々のあいだで、社会の「裏側」へ旅立とうとする試み——体験や現実に基づく一連の経験的な「人民のなかへ」型の実

験——が考案されるうえで、一定の役割を果たしていたのである。エマニュエル・テレは、専門化への生きた批判を体現する存在として「はだしの医者」という人物像を取り上げ、当時の情熱をきわめてはっきりと証言している。〔毛沢東が死んだ——訳者註〕一九七六年以降、幻滅した毛派の人々は、「後知恵」を働かせて、若いときには〔毛沢東や文革を——訳者註〕神秘化をしていたのだと一斉に反省しだすのだが、テレの話の例外さと貴重さは、自己批判と自己告発からなるそうしたお決まりの語りのパラダイムと袂を分かっているだけに、いっそう際立つものがある」（『その後』187-188頁）。以上の文脈で、ロス氏はテレの言葉（『共産主義の第三日目』1992）を引用する。これも長くながなが引いておく。「私は他の人々と同じく、文化大革命を——フランスから——熱烈に支持していた。だがその事実を若気の至りと捉えて、口をつぐんでいたほうがよいとか、反対に仰々しく告白したほうがよいとかなどは考えない。今ではもちろんわかっている。自分たちが思いをはせ、政治実践の一部を鼓舞した「文化大革命」は、中国が経験した文化大革命とはほとんど似たところがないことを。だが私は、自分の過去の称賛を気の触れた試みだったと片づけるつもりはない。実際、毛沢東主義の象徴的な力は、一九六〇年代末のヨーロッパで、中国の実態とは無関係に広がっていた。「われわれの」文化大革命は、中国のそれとはたしかにかけ離れていた。だがそこには、社会学や人類学によって長年研究され、規定されている集合的表象行為の重要性と一貫性が存在する。／しかし、この予想もしなかったが現実に起きた「民主主義」の爆発は、フランスでの別の爆発、つまり「平等」の爆発と結びついていた——インテリや幹部は大衆の声を聞き、大衆のために活動すべきであり、そのためには生活条件も同じくすべきだという考え方に。中国にも幹部と貧農大衆とを分離する固有の深い溝が存在していた。それは第三世界のあらゆる国で支配的な事態でもある。中国の場合、この溝は儒教文化と共産主義文化の影響が重なったことでさらに深まっていた。前者は教養階級と知識人の優位を、また後者は啓蒙された前衛の優位を肯定す

るからだ。こうした状況にあっていったい誰が、さげすまれた社会集団に属する人々の更生を目的とするプログラムを突拍子もないとか、犯罪的だなどと批判できただろうか。むしろ反対に、特権的な人々が「民衆」に対して傲慢に振る舞い、かれらを侮蔑していることが大きな特徴だった社会では、その動きをひっくり返そうと願ったことは賞賛されるべきではなかったのだろうか。「はだしの医者」、つまり現場で訓練された看護師や都市から農村へと向かった医学生は、ある意味で平等を求め、大衆的であろうとする意志のパラダイムを構成していたのだ[…]

(『その後』188-190頁)。

何を言っても自由であるが平等の経験だけは封じ込めようとする今日の政治的光景においては、ここに読まれる「はだしの医者」の経験は、あらためて階級闘争を移民労働者そして難民との団結を含めたかたちで政治的舞台に乗せることを意味するだろう¹²。「大衆の声を聞き、大衆のために活動すべきであり、そのためには生活条件も同じくすべきだ」という考え方」の今日的実現に、文革という経験の歴史的意義はある。

(まつもと・じゅんいちろう、言語労働者)

12 いわゆる「表現の自由」と平等の経験の封じ込めとの共存がシャルリ・エブド襲撃事件の背景にはある。少なくとも背景の一部であるとわたくしは考えている。この共存を理解するうえで示唆的なのは、本文で少し述べた「68年5月」以降の(新)左翼による歴史の篡奪である。『その後』は「68年5月」の衝撃を受けて誕生した雑誌・新聞を紹介しており、その中にベニ・レヴィやサルトルが中心となって立ち上げた日刊紙『リベラシオン』(1973-)がある。現在では中道左派の立場にある同紙はロス氏によると当初、民衆の言葉をとりだすというモチーフに沿って創刊されたという意味でランシエールらの雑誌『論理的反乱』に近いところに位置していた。この変遷の過程に件の共存を理解する手がかりがある。『論理的反乱』に掲載された『リベラシオン』の変遷を分析したピエール・サン・ジェルマンによる論文「愛しの『リベラシオン』?」(『論理的反乱』臨時増刊号1978所収)を紹介するロス氏の言葉を引いておく。『リベラシオン』が「六八年」当時とその後との運動史にとっていまでも不可欠な一部であるとすれば、それは「六八年」とその後の歴史をめぐる大衆的な表象が生み出されるなかで、同紙が唯一ではないにせよ、主要な媒体へと急速に変化したからである。／『論理的反乱』は、不満を持った消費者の視点からは書かないように、『リベ』の労働者五人に「調査」を行った。うち三人は主筆のセルジュ・ジュリー、元植字工で著述家のB・メイ、サルトルとともに『反逆は正しい』を執筆したフィリップ・ガヴィ。この論文は、対象者の発言に基づいて、ただちにこう評価する。すなわち、同紙が掲げる左翼主義かつ大衆主義的な目標は、最初期のある号が宣言するように、名もなき人々の声、つまり「下からのフランス、低所得者向け団地(HLM)、農地や工場の、地下鉄や路面電車のフランス」の声となることだった。しかしこうした目標は一九七七年で完全に失敗している。次いで『リベ』への分析が、この新聞が当初の目標を達成するかわりに実現した三つのもの、すなわち民間報道機関、文化制度、そしてイデオロギー装置の観点から行われる。かつて人は活動家になることでジャーナリストになったが、いまは職業としてジャーナリストになる。日刊態勢の維持というプレッシャーもあって、当初は作業を全員で分担していたもの、次第に役割が明確に区分され、割り当てられるようになった。そして編集(日中の作業、おおむね男性)と印刷(夜間の作業、ほぼ女性)とのはっきりとした区別が、分業をめぐる昔ながらのさまざまな要素とともに、再び目につき始めた。「底辺」つまり元植字工の逸話がこのことをよく示している。／ある日、われわれは印刷工程を扱った四頁の記事を本紙に載せようとしていました[…。この新聞 [=『リベラシオン』——訳者註]で起きていることを示そうとしただけなのだけれども、それがかれらの気に障ったのです。われわれは聞わなければなりません。もし公表されたら会社を辞めると脅す連中さえいました[…。]連中は、この新聞に関して、自分とは異なる見方があると考えただけで面白くなかったのです。かれらにとって、われわれがやろうとしたことはこの新聞の政治的分析ではなかったのです。／(『その後』256-257頁)。この後でロス氏は主筆のジュリーが1976年以後、或るラジオ番組の制作に携わるようになったこと、また同紙の一面に主筆の署名入り社説が載るようになったことに触れる。これらを契機にスター・システムの個人主義化傾向が前景化してきたようである。次いでロス氏は次のように述べる。『リベ』の変化の理由ははっきりしていたとストルティ(『リベラシオン』の元記者マルティヌ・ストルティ——引用者註)はいいう。マージナルな領域で生活することへの疲れ、活動家の作風をやめたいという欲望、社会的承認への欲望、そしてもっと売れる紙面をつくる必要性があったからだ。しかし変化そのものは、さまざまなアリバイの陰に隠れて進んでいた。『リベラシオン』という寺院の番人をなんとか務めようとしながら、当の寺院の解体に精を出す人々のアリバイだ。一九七〇年代末、ストルティが同紙を退職する時点になると「大義に忠実であることはイデオロギー的な盲目性であり、愚かなアクティビズムを目指す活動家的な振る舞いと見なされた。その一方で、社会との和解は政治的タブーからの解放と見なされていた」[ストルティ『或る政治的な悲しみ』(1996)からの引用——引用者註] (『その後』258頁)。このようにして『リベラシオン』紙は当初のモチーフを離脱していくと同時にこの離脱を隠す操作を施すようになる。名(前)が(身)体を表わさなくなると言ったらよいだろうか。そして、不平等を隠蔽する「表現の自由」を理解するにあたって決定的と思われるのは、ロス氏が紹介する次の逸話である。『リベ』は「情報」を伝えるだけの新聞になった。矛盾を抱える現実について、その変革を目指す立場から分析を行うのではなく、それをただ説明するだけの新聞になってしまった。こうして編集部は、最低限の共通見解を生み出すための共同作業という性格を弱め、バラバラな個人の集まりへと変わる。したがって「読者からの手紙」欄の役割も、『論理的反乱』の筆者たちによれば、「民衆に発言の場を提供する」という最初に掲げた目的のアリバイに変わってしまった。『リベ』が読者に紙面を開放するのは、たいていの場合、新聞としての立場を明らかにしたくないときだった。それは、たとえばレイブのようにある特定の話題がきわめて物議を醸したときであり、バーダー-マインホフグループ [=ドイツ赤軍——訳者註]のメンバーが死亡し、『リベ』の編集スタッフが、自分の左翼活動家としての過去に非常に居心地の悪さを覚えたときだった。『リベ』は社としての見解が求められそうな話題になると、B・メイによれば「大衆の意見」に従うことで、その場を切り抜けようとした。／自分たちの番になると、編集部はボールを読者に投げてしまう。バーダーたちのグループの事件のときは特にひどかった。一定の距離を保ち、かれらに過度に肩入れしていないように見せるために、われわれはかれらを批判も支持もしませんでした。抗議の手紙がたくさん寄せられました。すると突然、バランスを取り戻すために、読者投稿を見聞き二ページで扱うことになったのです。そしてこんな調子で次のメッセージが発せられました。『リベ』はバーダーたちを心情的には支持するが、政治的には批判する、と／[B・メイへの調査結果からの引用——引用者註] (『その後』259-260頁)。

——今後の研究会予定——

第7回 3月31日(木) 専修大学神田校舎

「自由派知識人の文革批判——徐友漁の思想と行動」報告・及川淳子(法政大学客員学術研究員)

蔵出し批評

フーコーによる裁判批判

——連載・滴水洞から

前田年昭

文化大革命を否定する人びとの意見のひとつに、公開批判、公開処刑は「野蛮」だという反発がある。西欧近代が実現してきた裁判制度は人類の「到達点」のひとつだが、これのほうが野蛮だと私は思うのだ。なぜなら《復讐の権原》という基本的権利を、国家に委託してしまうことによって、放棄するものだからだ。そのことによってますます国家のドレイになってしまい、何ひとつ道理も利益もないではないか。この本質を理解できない日本の新旧左翼は最近も裁判員制度を批判できずその走狗となっているが、まことに情けないことである。

M.フーコーは1972年「人民裁判について マオイスト（毛沢東主義者）たちとの討論」でいいことを言っている〔ちくま学芸文庫版『フーコー・コレクション 4』2006年、pp.96-154〕。少々長くなるが耳を傾けてみよう。

【……裁判所というものは人民の正義の自然な表出などではなく、むしろ反対に、歴史的機能として、その正義を国家装置独特の諸制度の内部にあらためて書き込むことにより、正義を引っ捕らえ、飼い慣らし、組み伏せることをもって旨とするものなのではないか。〔中略〕…舞台では、長机の後ろにひかえた判事たちが、「復讐を叫ぶ」人民と、「有罪」であったり「無罪」であったりする被告たちとのあいだの第三の審級を代表する。「真実」を確定するため、あるいは「自白」を得るための尋問があり、何が「正当」であるかを知るための審理がある。つまり、権威の手によって万人に押しつけられた審級である。ここには、まだ崩れ易さの感はぬぐえないとはいえ、一つの国家装置の萌芽が再び姿を現しているのではないか？ 階級的抑圧の可能性が再び姿を現しているのではないか？ 人民とその敵のあいだに、真と偽、有罪と無罪、正当と不正の区別を打ち立て

るものとして一個の中立的な審級を設置するということは、人民の正義に対抗するための手段ではないか？ 観念的な仲裁を盾にとって、現実の闘争における人民の正義を非武装化するための手段なのではないか？ 裁判所とは、人民の正義の一形態であるところか、その最初の歪曲なのではないか、と僕が疑うのもそうした理由による。】pp.97-98

【……被告原告双方に対して中立の立場を取る人々が存在し得るという考え方、彼らが絶対的な価値をもつ正義の観念に基づいて双方を裁き得るという考え方、そして、彼らが決定したことは実行に移されなければならないという考え方、僕は、もうこれだけでかなり深刻な意味をもっていると思うし、また、そうした考え方が、すでに人民の正義という観念そのものと無縁になっていると思う。人民裁判の場合、三つの要素があるわけではない。あるのは大衆とその敵だ。その場合、大衆が誰かを敵とみなし、その敵を懲らしめてやろう——あるいは再教育してやろう——と決意する時、大衆は、正義という抽象的な普遍概念などには頼らずに、単に自分たちの経験に依拠する。つまり自分たちが受けた損害の経験、自分たちが傷つけられ、虐げられた時のやり方に倣うのだ。しかも、彼らの決定は権威をともなった決定ではない。つまり、彼らは決定事項に価値をもたせる能力を備えた国家装置などには頼らずに、単純かつ純粹に自分たちの決定を実行に移すのだ。したがって、僕の拭い難い印象としては、裁判所という組織、少なくともその西欧的な組織が、人民の正義という実践とは無縁たらざるを得ない、ということだ。】p.108

【……われわれのような社会においては、逆に、司法という装置がきわめて重要な国家装置であり続けてきた。ただ、その歴史が常に覆い隠されてきただけである。〔中略〕刑法体系は大衆のなかにかく

つかの矛盾を持ち込むことをもって、その機能としてきた。そして、その矛盾の最たるものは、プロレタリア化した下層民とプロレタリア化していない下層民を互いに反目させる、というものだ。中世において本質的に収税機能を果たしていた刑法体系が、ある時代以降、暴動抑止の闘いに専念するようになった。それまで、民衆暴動の鎮圧はとりわけ軍隊の仕事だった。それが、ある時から、司法＝警察＝監獄の複合システムをもって対処される、というよりもむしろ予防されるようになったのだ。〔中略〕…物乞い、浮浪者、無為の者たちを対象にした数々の法、彼らを狩り出す目的で作られた数々の警察組織といったものはすべて、物乞い、浮浪者、無為の者たちが置かれたまさにその場所で、彼らに対して用意されたきわめて劣悪な条件を、力づくで——法や組織の役目はまさにそれだったのだから——受理させていたのだ。当人がその条件を拒んでも、逃げ出そうとしても、物乞いを続けても、あるいは「何もしない」でいても、結局行き着くのは監獄、そして多くの場合、強制労働であった。他方、この刑法体系が特権的な対象としていたのは、下層民のなかでも最も可動性にすぐれ、最も激しやすく、最も「暴力的」な分子、つまり、いつ直接武装行動に出ても不思議はない連中であった。借金で首が回らなくなって土地を捨てた農夫、納税をすっぽかしてきた農民、盗みのかどで土地を追われた労働者、町のどぶ掃除に従事することを拒んだ浮浪者や物乞い、畑荒

らしで暮らしをたてている者たち、こそ泥、追いはぎ、あるいは、武装集団をなして税務署その他、役人たちの所に襲撃をかける者たち、要するに、都市や地方の暴動に槍や鉄砲をもって加わる連中、こうした人々のあいだには、見事な合議、完全な連絡網のようなものが存在し、そのなかで個人がその都度役割を取っ替え引っ替えしていた。こうした「危険な」連中こそ、別の場所に（監獄に、総合病院に、ガレー船に、植民地に）取りのけておかねばならなかった。民衆の抵抗運動の際、彼らに斬り込み隊の役目を果たさせないようにするためである。こうした恐怖が十八世紀に増大した。同じ恐怖が、大革命直後、あるいは十九世紀をつうじてさまざまな擾乱の際、さらに増大した。そこで刑法体系の第三の役目が際立つのだ。つまりプロレタリアートの目に、プロレタリア化していない下層民の姿を、周縁的、危険、反道徳的で、社会全体にとっての脅威、民衆の残滓、屑、いわゆる「賊」として映し出してやるのだ。ブルジョワジーにとっては、刑罰の法体系をつうじ、監獄をつうじ、さらには新聞や「文学」をつうじて、「普遍的」とされた道徳のいくつかのカテゴリーをプロレタリアートに課することが主眼となる。この自称「普遍的」道徳カテゴリーが、プロレタリアートとプロレタリア化されていない下層民とのあいだでイデオロギー的な障壁の役目を果たす、という仕組みだ。……】 pp.117-119

(2006.8.24)

〔1ページからの続き〕

人はどういう態度をとったかをめぐる論議がされた。

世代や個人の経験を超えて文化大革命をどのように現在に提起するか、それを再認識する討議となった。
(敬称略、文責・田中)

折衷主義からは正しさは「見えない」

前田年昭

認識論は、ひとつつながりの感性的認識のなかにその人の思想が現れると教えている。今回の報告には、文化大革命を語る日本の左翼から知識人にいたる気

分がよく表れている。それは文化大革命の「理念」と「悲惨」、「正しさ」と「誤り」を腑分けし、前者の理想はよしとしながらも後者の暴力の前にたじろいでしまう、そのような気分である。これは、後出しじゃんけんのようにとてもぶざまだと私は思う。

中国の党に卑屈に拝跪するばかりだった者と一線を画して、独自に中国の党が認めない『毛沢東最高指示』を出した新島淳良に対する福岡愛子の視線を「快」とする感性的認識はどこからくるのだろうか。

いくら誤りの面を明らかにすることを以て正しさの面を明らかにすると言ってみても、それは必ず折

〔27ページに続く〕

『星火』をめぐる現在

——譚蟬雪との会見

土屋昌明

2015年3月に私たちが専修大学で上映した胡傑監督の『星火』は、中国現代史で封印されている「星火事件」（1960年）を詳細に分析したドキュメンタリーであった。この事件は、1957年の反右派運動で右派とされた教師・学生たちが、1959年から60年にかけて、甘粛の農村での飢饉をめぐる悲惨な状況を何とかしようと、政治的な地下活動をした結果、40数名が逮捕された事件であった。胡傑監督は、事件の詳細とともに、そこに登場する多くの人士たちのかつての思想・行動、そして健在の人士の現在の思想・行動を活写している¹。なかでも、中心人物の張春元をよく知っている譚蟬雪さんの語りと生き方には、瞠目させられるものがある。私は、この事件をより深く理解したいと思い、また譚さんに対する私たちの敬意を表したいと思って、2015年10月某日、譚蟬雪さんに会いに行った。

彼女は、ドキュメンタリー『星火』に登場したときにくらべて、少し年を取った感じがしたが、声を聞くと、映画の声と同じく、きれのある若々しい感じだった。はっきりしかりした発音で、一語ずつ確実に語る口調は、歴史の苦難の道を踏みしめているかのようなようだった。高齢のため、さすがに腰痛があって、遠出はできないそうだが、今後も星火事件のことを調査するのに全力を注ぐ、とのことであった。「孫のことより、残された時間が少ない私には、そちらの方が重要です」という言葉を聞いて、私はあらためてこの問題の歴史的な重要性を噛みしめた。

以下は、譚蟬雪さんが話した内容を整理し、譚蟬雪編著『求索』（香港、天馬出版公司、2012年）を参照しつつ、理解の便宜のために私なりの問題意識

と解説を加えたものである。

譚蟬雪が香港脱出を企てた経緯 胡傑監督の映画では、譚さんが香港に脱出しようとして捕まり、そのために張春元も逮捕される事情が採りあげられている。

譚さんが香港脱出を企てたのは、1960年5月のことであった。譚さんの親戚が香港にいて、脱出したあとの落ち着き先があった。当時、深圳地区は農村で、川向こうはすぐに香港だった。そのあたりの農村では、香港に脱出する人があとをたたく、香港脱出は日常的な話題だった。譚さんがいた村でも、ほとんどの若者・中年は香港に脱出してしまい、老人と子供だけが残されている、というありさまだった²。譚さんは、自分の身に逮捕が逼っているから香港脱出を考えたのではなく、自分が先に香港に脱出してから張春元らの脱出手引きをしようとしたのでもなかった。香港でユーゴスラビア大使館に駆け込み、大飢饉を国際的に表面化させようと考えたのである³。

しかし、渡河する前に警備兵につかまり、留置所に置かれた。留置所の労働は相当にひどいものだった。看守から手紙を書いてもよいと言われ、譚さんは広州の友人である梁炎武に手紙を出して状況を知らせた⁴。梁炎武は北京大学の大学院生で、顧雁のクラスメートだった。彼を通じて、譚さんの居所が張春元に知らされた。

通常であれば、半月ばかりそこで労働すると、釈放されるはずであった。と言うのは、脱出する人が非常に多いため、当局は一人一人に対応しきれず、本人の家族を呼んで訓戒して帰す習いだったのだ。ところが譚さんの場合は、張春元が迎えに来たため、

1 詳しくは、土屋昌明「胡傑監督『星火』初探」『専修大学社会科学研究所月報』623号（2015年5月20日）を参照のこと。

2 その結果、習仲勳が広東省第一書記のときに、密航が不問に付された時期があったことに話題が及んだ。これは1978年のことである。習仲勳は、広東省の経済発展を進めるために、党中央に経済特区構想を提起した。深圳市は1980年5月に正式に経済特区となる。

3 彼らが林昭から「ユーゴスラビア共産主義者同盟綱領草案」を見せられたことは、胡傑の映画でも強調されている。譚さんは、香港に親戚がいるので、国外のこの方面との連携を模索しようとしたようである。『求索』104頁。

4 譚さんは、この行為を「幼稚すぎる」「自分の一生で最大の許されざる間違い」と書いている。『求索』106頁。

留置場当局は疑念を抱いた。第一に、張春元は北方なまりの言葉だった。広東の女子を迎えに、どうして北方なまりの男がくるのか？ 第二に、張春元が提示した身分証は、湖北省公安厅のものだった。広東のトラブルになぜわざわざ湖北から来るのか？ そこで留置所の係官は、湖北省公安厅に電話で問い合わせた。かくして、彼らが右派学生であることが露見した。二人とも拘留されて別々に蘭州に移送され、ともに貢元巷看守所というところに留置された。

張春元が脱獄して再び逮捕された経緯 譚さんは貢元巷看守所でたまたま、同じ看守所に張春元がいることに気がついた。もちろん会うことはできない。食事係の囚人を通じて、張春元が病院に送られることを知った。張春元は、初志を遂げるためには貢元巷看守所を脱走しなければならないと考え、そのために「苦肉の計」をはかった。故意に食事が進まないふりをし、自分で自分の口内をかみ切って出血させ、食べたものを吐瀉して病人を偽装した。彼は1961年7月末に当地の労働改造病院に移され、体力が回復するのを待った。その間に彼は、多くの人から、その病院の守衛の状況について情報提供を受けた。ある日、夕食のあと、守衛がのんびりしている隙に、そこから脱走した。

張春元が脱走後に、どこで何をしようとしたのか、どのようにして再び逮捕されたのかは、胡傑の映画ではよくわからない。胡傑は、孫自鈞が北京の紅旗新聞社に飢饉のことを通報して逮捕、懲役になったことを映画の始めに採りあげており、張春元が北京に行って同じ轍を踏んだように受け取れる。しかし、じつはそうではない。

張春元は脱走後、上海で林昭と顧雁に会おうとしたが、二人ともすでに捕まっていた⁵。そこで、ひとまず友人をたよって杭州に行き、そのあと広州に戻って自分の「衣服」（なぜ衣服をわざわざ広州まで取りに行くのかは不明）など荷物をそろえ、それから北京に向かおうと考えた。北京へ行って、自分が農村で見た飢饉のことをすべて直訴する計画だった。どこの出版社あるいは政府部門に訴えるかは、具体的に決める段階ではなかった。ところが、杭州

で逮捕されてしまった。その事情は次のようであった。

当時、農村から都市に大量に流入してきた人々が、都市でホームレス状態になっていた。これを「盲流」という。当局はこれを集中的に管理しなければ、都市の秩序や治安が守れないと考えた。流入した者とみなされれば、警官から職務質問を受け、身分証明書を提示しなければならない。こうした人々を検査するセンターがあり、そこに留置されて尋問を受ける。身分証明書を提示して、都市の人間でなければ、強制的に送還される。張春元は脱獄後、身分証明になるものは何も持っていなかったのである。

『星火』の配布について 胡傑の映画によると、『星火』（シーン41）で、『星火』印刷に対する林昭の考えが譚蟬雪から語られている。「林昭は初め刊行に賛成ではなかった。それには2つの理由がある。まず秘密でこれを印刷すると、執筆者と印刷者に危険だけでなく、読者にも同じく危険だ。それにもう1つ、これを印刷して人に何を与えられるのか？ リスクを払う価値があるのか？ 誰でもわかっている話なら、わざわざ書くまでもない。しかし林昭はこうも言った。考えを交換して、影響を拡げて団結しあうために、特に分散して自由に行動できない状況では、『星火』は啓蒙に欠くべからざるものだ」。譚さんによれば、林昭は配布に反対であった。このような手紙は、受け取った者にとっても危険であり、効力が期待できない。林昭は、香港への脱出（ユーゴスラビア大使館への駆け込み）に賛成だった。しかし結果的には、張春元らは全国の五大都市の幹部に自作の論文「論人民公社」を送りつけることにした。

これは、『星火』から始まった議論の役割を、漸進から激進に、思想のレベルから政変のレベルに持っていこうとしたもので、非常に大きな方向転換であると私には思われる。胡傑の映画では、この点を譚蟬雪の語りで紹介しているが、これは張春元の独走だったのか、それともメンバーの一致した考えだったのか。

譚さんによれば、これは張春元の独走ではなく、メンバーが相談して決めたものだった。林昭も最終

5 『求索』118頁。

的には同意して、北京の送付先の情報提供を受け持った。五大都市のどの幹部に送るか、彼らの連絡先はどこか、といった具体的な作業に入っていた段階で、メンバーは密告にあって逮捕され、送付は実現しなかった。

では張春元らは、ある段階でそのように考え方を変えたことになる。胡傑監督の映画によれば、彼らは当初から、農村の飢饉の状況を党上層部に知らせようという動機が強かった。そうすると、直訴によって政変をおこし、現状を変えようというストレートな彼らの考えに対して、林昭はそれを調整する立場だったことになる。胡傑は、西北の友人たちは待つことができないのが欠点だ、という林昭の言葉を採りあげている。農村にいた張春元らと、都会にいた林昭とのあいだで、農村の悲惨な状況に対する認識の違いがあったのかもしれない。つまり、大飢饉の直接的原因を取り除くためには、一刻も早く現場の統治者（省書記レベル）を上層から変更させなければならない、各地の党幹部には、それを実行できる人物がいる、と張春元らは考えたのに対して、林昭は、大衆の覚醒によって共産党が路線そのものを変更せざるを得なくなる、そんな方向を重視していたように思われる。

張春元らがかりに直訴した場合、それに効力はありえたのか。譚さんらも楽観していたわけではなかった。張春元の「論人民公社」は、人民公社の実態を書いていたので、少なくとも上層部に現場のことを知らせることができる。彼らが論文の内容を信じるかどうかは、別の問題であった。譚さんらは、効力があるかもしれないことについて努力するしかないと考えた。「自分たちの考えがいつべんに通るなんてありえない、とわかっていました」と譚さんは語った。

ところで胡傑は、甘粛省第一書記の張仲良が、党中央への上訴の手紙を検閲したことを採りあげている。これはある意味で、党中央への上訴を張仲良が恐れていたことを示している。実際、譚さんと張春元が蘭州の看守所で悪戦苦闘していた頃、1960年

12月上旬、蘭州では党西北局による蘭州会議が招集され、省第一書記の張仲良は解職された。そして、このころから食糧の配給が増え始めたのであった⁶。この会議は、党中央監察委員の錢瑛が推進したものであるが、彼女がどのようにして甘粛の状況を知ったのか、誰かの上訴によるのかは不明である。この結果からすると、当時の状況において張春元の考え方は、このような政変をおこす、最も現実的な方法だったとみるべきではないか、と私には思われる。

文革と監獄内の 状況について 譚さんがいた監獄内では、政治犯と刑事犯がいた。この二つには違いがある。刑事犯は毛沢東のいう「人民内部の矛盾」だが、政治犯はそうではない。例えば、刑事犯が人を一人殺したのに対して、政治犯は何百何千という人を思想的にダメにした。だから、刑事犯は政治犯を監督すべきである、と看守からは言われていた。この看守の言い方は、階級闘争を推進する文革のやり方を監獄内に導入したものである。

ある日突然、朝夕に集合し、毛沢東の肖像に敬礼して報告する日課が始まった。初めはまるで仏像を拝むように感じたが、誰もそんなことは言わない。譚さんは、女囚のなかで班長にされ、朝夕には毛沢東に対する「請罪詞」と「彙報詞」を読み上げ、ほかの女囚は彼女について音読した⁷。

監獄内は、決してコミュニケーションの無い世界ではない点に注意すべきだ、と譚さんは強調する。囚人の中には、口にしなくても心では譚さんに同情する者がいて、秘密の連絡をしてくれることが多くあった。事件が起こると、一言か二言だけだが、譚さんにも伝わってきた。ある日、食事係の女囚がワゴンを運んできたとき、譚さんは班長なので彼女に近づいたところ、その食事係から一言「張春元が来た」と言われた。譚さんはすぐに意味を悟り、その女囚がバケツを持って歩いているところに近づいていき、こう告げた。「張春元に伝えて。張春元は永遠にわたしの心の中に生きている、と」。これが精一杯であり、それ以上話し合うと見つかってしまう危険があったという。

6 この当時の食糧事情の具体的状況は、王兵監督のドキュメンタリー『鳳鳴』で、和鳳鳴が語っている。

7 この音読は、本心からの言葉ではないという不快感のみならず、読み誤らないよう緊張を要する作業だったという。『求索』128頁。

張春元と杜映華が 県書記ながら、張春元ら右派学生死刑になる経緯 を支持した杜映華は、雲霧山労働改造所に送られた。ここは気候が厳しく、彼は病気になった。所管は、彼がもと県委員会書記だったことを考慮して、天水第三監獄に移した。そこでは、比較的軽い労働をあてがわれ、自由度も高かった。譚さんの推測では、杜映華はそこに移ってから、張春元が同じ監獄にいることを食事係から聞きつけたと思われる。そこで杜映華は、簡単なメモを食事係に渡し、それが張春元の手が届いた。それで、張春元も杜映華が同じ監獄にいることを知った。初めは簡単な挨拶程度のメモだったが、次第に内容のあるメモを交換するようになった。そして杜映華は、刑期が満了を迎えようとするころ、出獄後どうすべきかを張春元に尋ねた。張春元はこうメモに書いた。「きみは農村に根を張るようにせよ。あちこち行くことはない。なぜなら、きみは農村をよく理解しているし、農民もきみに心を開いている」。

杜映華は自分の釈放後について、なぜリスクを冒してまで張春元に尋ねたのか。メモのやりとりで慣れて、油断したという側面はあるだろう。それに張春元の答えは、もともと農村で働いていた杜映華に対して、それほど特殊なものとも思えない。しかし譚さんによれば、杜映華が張春元の答えに期待していたのは、先に出獄した者が獄中の『星火』のメンバーに対して何をしてやれるか、ということだったという。

そうすると、張春元の言葉は、その観点から読むべきなのである。おそらく、出獄後も政策に対して農民の立場から独立した思考をせよ、という意味がこもっているのではなかろうか。

杜映華は釈放前に、張春元も収監されたまま、二度目の反革命罪で再逮捕、死刑が宣告されて、即時執行された。その事情は次のようであった⁸。

文革が発動されると、1966年9月に、彼らが収監された天水第三監獄では社会教育運動がおこなわれた。囚人は自分の犯した問題を告白するとともに、他人の犯した問題を暴露することによって、自分の刑期を短くすることが求められた。このため、杜映

華と張春元のあいだでメモの受け渡しをした囚人が、その事情を告白したのだった。

出獄後の 譚さんは、1973年末に釈放された。出獄譚焯雪 してからお兄さんのところを頼ろうと考えていた。しかし、出獄時にお兄さんはすでに亡くなっていることをはじめて知らされた。帰れる場所はなく、仕事もなかった。当時は、こういう者のための労働改造農場が設けられていた。出獄時、刑務所の幹部の一人（女性、天津南開中学出身）が譚さんに同情し、行き先が決まるまで自宅に3日ほど滞在させてくれた。こうして農場ではなく、工場に配置されることになった。工場の方が、生活環境においていくぶん楽だからである。工場は酒泉で、染織の仕事をした。

1980年に名誉回復後、譚さんはやっと自由な行動ができるようになった。酒泉師範学校に友人がいて紹介を受け、同年8月ころに校長と党書記の前で模擬授業の試験を受けて採用された。蘭州大学で学んで以来、獄中では読書などの機会はなかった。

勉強ができるようになり、農村の宝巻の研究論文を書いた。宝巻とは、仏教や道教の教義を説く民間宗教の唱導のテキストである。木魚などの打楽器の調子に合わせて朗詠されたり、書物として印刷されて流布したりした。日本では戦前から研究されているが、中国では迷信を説くテキストとして軽視されただけでなく、反体制的な民間宗教を宣伝するものとして、90年代後半になっても研究や出版が抑圧されていた。譚さんが1980年当時に宝巻に着目していたのは、見識があると言うべきである。譚さんによれば、農村で宝巻が尊重されているのを見て、農民を理解するためには宝巻を研究すべきだと考えたという。その論文が敦煌学の研究者に認められ、2年後に敦煌研究院に異動した。

敦煌に異動後は、おもに敦煌の民俗について研究した。宝巻の研究は資料だけ収集したが、定年後に研究しようと考えていた。それから定年退職するまで敦煌民俗の専門書を7冊出した。敦煌民俗の研究には、石窟の壁画を直接見て検討した。

退職後にやるつもりだった宝巻の研究は、もうできないので、収集した資料は研究機関に寄贈すると

8『求索』131頁。

のことである。日本の研究者に寄贈する考えもあったが、個人や少数では対応できず、結局、甘肅省図書館に寄贈する予定とのこと。

私は1982年9月と90年代中頃の2回、敦煌石窟を訪れている。うち1982年のときは、日中友好訪中団の一員として敦煌研究院の方々と交流会を持った。もしかしたらそのときに、譚さんと同席したのかもしれない。

『星火』⁹をめぐって 譚さんは、できれば来年、「星火」をめぐってもう1冊出版する予定とのこと。「星火」に関する国内の研究を収集してまとめる。

なかでも、数年前に自費出版された王中一の『赤子真情』が注目すべきである。この件については、胡傑の映画にも出てこない。張春元が死刑判決を受けて執行されるまでの最期の十日間、王中一は留置所で張春元と同室だった。彼は組長だったため、張春元に言い残すことはないか聞いた。張春元は「譚蟬雪に申し訳がない。あなたが出獄後、譚蟬雪に会うことができたなら、彼女に私の様子を伝えてほしい」と言った。そう言われた王中一だが、譚蟬雪という名前しかわからない人物をどうやって捜し出すのか。しかし、死刑執行を目前にした者からそう言われて、彼は「わかった。もし譚さんに会ったら、あなたのことを伝える」と答えた。これは1970年のこと

だった。

王中一はずっとこのことを忘れなかった。その後、彼も名誉回復⁹、常州に戻った。数年前のある日、本屋で本をひっくりかえしていたら、たまたま譚蟬雪の名前を見つけ¹⁰、すぐに敦煌研究院の人事課に電話を掛けた。人事課は譚さんに電話を掛けてきて、王中一という人が捜しているという。しかし譚さんは、その名前を聞いたこともなかった。人事課は譚さんの自宅の電話を教えていいか許可を求め、譚さんがOKをして、当人と電話で話すことができた。そして数日後に王中一と面会して話し合った。彼から張春元の言葉と最期の様子を聞いて、喩えようもないほど感動したという。

譚さんは一生を通じて、自殺を考えたことも、挫折そうになったこともないという。どうしてそのように生きてこられたのか。彼女はこう答えた。「中国人は「良心」を大切にします。自分で良心に悖る、申し訳ないということでなければ、自分の信念にたよって生きていけるのです。私は当初から、自分たちの事案は白日の下に明らかになるときがある、と信じていました。『星火』は、保存可能な中国初の地下刊行物です。それ以前の地下刊行物はすべてなくなってしまったのです。是非とも『星火』の真実を明らかにしなければなりません。」

9 王中一は、張春元と訣別した4ヶ月後に結審し、懲役10年、1979年に名誉回復。出獄後は教育関係の仕事をし、2003年に定年退職。水横舟「右派英烈張春元の最後十天」『開放網』2013年12月10日。http://www.open.com.hk/content.php?id=1619#_VoJ7Of95dg

10 水横舟「右派英烈張春元の最後十天」『開放網』2013年12月10日では、インターネット上の裴毅然の文を見て、譚蟬雪の連絡先を知ったという。

〔22ページからの続き〕

衷主義に帰着してしまうであろうことを、私は認識論の立場から危惧し、批判的に指摘しておきたい。

「死者」を見つめるまなざし

及川淳子

「文革における死者の意味を考えることが私にとっての文革——課題ではないか」。朝氏が語る「死者」とは、文革当時の犠牲者のみならず、日本における「政治的死」をも意味している。1972年の連合赤軍によるリンチ殺人事件に続いて、在籍していた大学内で学生が虐殺されるという衝撃的な事件を身近に

経験した朝氏は、「死者の意味」を考え続けることで「私にとっての文革」と向き合っているのだ。

そして、「死者」を見つめる朝氏のまなざしは、文革の「教訓」として「暴力の連鎖を断ち切る」という重大な課題にも向けられている。それは、歴史の問題であり、現在の問題でもある。朝氏が指摘したように、言論空間の封殺は中国当局による「暴力」にほかならない。「政治的死」が様相を異にして繰り返されている中国の現実を、私たちは同時代に生きる隣人としてどのように見つめていくべきか。参加者それぞれのスタンスやアプローチに再考を迫る報告であったと思う。

胡傑監督『星火』字幕（その2）

土屋昌明 編

〔第5号からのつづき〕

20

星火のメンバーである向承鑑が語る。

一发生饿死人，这个时候我一头把我的理科的书整个不看了，过去是一边工作，一边劳考，一边还作学问，数理化书那不得了，还拚命的努力向那个目标奋斗。这时就一百八十度的大转弯，我就看的是马列，我是从这些书里面找答案，而且争分夺秒地看，那时候记忆也比较好，又能够联系实际，看问题还是比较敏锐，后来我就想，向承鉴你可千万不要因为自己划右受了委曲，就产生个人有些成见，对党怨恨，不要怀着个人的感情，不要以点带面，以偏概全，千万不要犯错误。你要尽可能掌握更全面的情况。

餓死者が出た後、理科系の本を見る気がしなくなった。それまでは仕事しながら、勉強に精を出した。数理や化学など一生懸命やった。それが180度転回して、マルクス・レーニンを読むようになった。そこから答えを出そうと、一刻を惜しんで読んだ。その頃は記憶力がよかつたし、現実とも関連づけられた。問題の所在がよくわかつた。自分にこう言いかけた。お前は右派にされたことに不満で、個人的な考えを持ってはだめだ。党に対する怨嗟とか、個人的感情を抱くな、一面的に考えるな、誤りを犯してはならぬ、全面的な状況把握をせよと。

21

『星火』2号、楊賢勇「ある歌から」を監督が朗読。

《星火》二期《从一首歌谈起》作者 杨贤勇：我亲眼看见，农民饿的面黄肌瘦，普遍害了一种由于营养的严重缺乏而造成的水肿病，道路旁，大树下，田野中到处是死尸，有很多家庭甚至断粮绝种：人全部死光了。每年，政府总是公布说：粮食大跃进，大增产，大丰收，人民生活大改善，大提高，这是真的吗？

私は見た、農民のやせ衰えた姿を、栄養失調から水腫を発している姿を。道ばた・木の下・畑の中 至るところ死体だ。家族全員が死滅した家庭。毎年、政府の公報は、食糧は大躍進・大增産・大豊作、生活は大改善と言う。ホントか？

22

星火メンバーの譚蟬雪が語る。

譚蟬雪（星火成员）：对我刺激比较大的是我住的那一人家，孩子们都跑掉了，就剩下老俩口子，突然半夜哭喊，我去了一看，老爷子没了，直挺挺地躺着。因为老爷子平时对我们挺好的，就经常说：娃唉你们要当心呐，经

私がやっかいになった一家では、子供たちは出て行って老夫婦が残された。ある晩、急に泣き声が一、見に行くと旦那さんが死んでいた、ピンとまっすぐに寝たまま。彼はいつもよくしてくれた。気をつけなさいと、いつ



常对我们说。所以我当时看到他走了，唉呀！我又看到大娘这么样的哭，哭天喊地。对我印象刺激太深。那时候我们还吃食堂，他每一次从食堂打饭回来，他尽量多均一点给老伴吃，那么他自己相应的就减少了，那么常年累月下来，亏欠的多了。我们很清楚，那就是饿死的。

23

『星火』1号、張春元「農民と農奴と奴隸」を監督が朗読。

《星火》一期 农民农奴和奴隶》作者张春元：当前在广大农村中，进行所谓反右倾运动，就是打击对农民疾苦略表同情的人，这些人主要是农村基层干部，他们来自农民的家庭或本人就是农民，和农民有着千丝万缕的联系，而且大部分都是农村党员。

24

農村の教師との対話。

問：1960年的时候我们这个村饿死人的情况你知道吗？

乡村教师：人死了没人埋，一般的是一个队上，妇女还不容易饿死，四五个妇女，食堂给代用食的炒面给上一把，你们几个去埋去。

25

甘肅の丘陵。歩いてきた農夫との対話。

胡傑：老师傅，这里以前是不是也是这样富裕？

农民：以前还可以，现在更富裕，这个地方产的东西也多得很，菜籽、小麦、苞谷那菜样样都有。

胡傑：那时候这里饿死人很多是吗？

农民：1960年生活困难的很。

胡傑：为什么？这里不是很好吗？

农民：58年一个三面红旗一个大跃进就把农业搞坏了。大炼钢铁，搞的是浮夸。这个地方饿死的人少，尤其是那个山里饿死的人多，还有一个咱们和苏联的关系不好，斯大林给我们帮助，赫鲁晓夫上台后给我们要账，咱们国家穷还不起。就把粮食给他们了。

も言っていた。だから私は彼が亡くなったのを見て、奥さんもひとく泣いているし、強烈に打ちのめされた。当時は共同食堂での食事で、彼は食べ物を持ってきて、なるべく奥さんに分けていた。だから自分の分は少なかった。こうして栄養不足になった。はっきりわかった、これは餓死だと。

いま農村で反右傾運動が進んでいる。それは農民に同情した者を痛めつけることだ。やられるのは現場の幹部である。なぜなら彼らは農民出身で、農民と親和的な関係にあり、農村の黨員だからだ。

問：1960年の餓死者の状況は？

村の教師：人が死んでも埋める人がいない。女性はなかなか餓死しないんだ。食堂から代用食の麺を少し渡して、女たちに埋めさせた。



胡傑：この辺りは昔もこんな豊かだった？

農民：まあまあだが今の方が豊かだ。この辺りは物の種類も多い。菜種・小麦・とうもろこし等いろいろ。

胡傑：かつては餓死者が出たって？

農民：1960年はひどかった。

胡傑：この辺りは出来がいいのでは？

農民：58年に三面红旗で大躍進が農業を駄目にした。鉄鋼大增産だ、デタラメやったものだ。この辺りは餓死者がまだ少ない。あそこの山村は餓死者が多かった。それにソ連との関係が悪化して、スターリンは援助してくれたが、フルシチョフは借金を取り立てた。当時はカネがなくて返せなかった。それで食糧で返したんだ。

26

天水の入口を示す門牌、道ばたの人々。星火メンバーの譚蟬雪が語る。質問に答えた農夫の後ろ姿。

譚蟬雪（星火成員）：唉呀！天水那个地方农民是很朴实的。哪怕他自己饿肚子，他绝对不会加害与你，有的时候年龄大些的人，总是对我们抱着同情，也有些可怜的态度。

譚蟬雪：天水あたりの農民は質朴だった。腹がいくら減っても、人から盗ったりは絶対しない。年寄りなんかは、私たち右派に同情してくれた、憐れむ態度すらあった。

27

農村の教師の話に戻る。

乡村教师：她们没有力量挖，挖的这么浅，刚把尸体掩埋住就行了。就这些妇女埋人，男人家都没力量埋。

農村の教師：女たちは土を掘る力がないから、掘っても浅いんだ。遺体が土に隠れる程度でいいことにした。それで女たちが埋めたんだ。男はみんな埋める力が出なかった。

28

『星火』1号、向承鑑「当面する情勢と我々の任務」を監督が朗読。

《星火》一期《目前形势及我们的任务》作者 向承鑑：一个新兴的官僚统治阶层，在1957年之前就已经萌芽，但在1957年后，它的特征才清楚和完善起来，官僚统治阶层特征在于，在政治上、精神上和经济上都享有特权，对其它阶层的人民进行欺压、掠夺和奴役。

新たな官僚統治階層は、1957年以前に萌芽していたが、57年以後に、その特徴が明確になってきた。官僚統治階層の特徴は一政治的にも精神的にも経済的にも特権を有し、他の階層の人民に弾圧と搾取と奴隷化を加える。

29

星火のメンバーの向承鑑が語る。

向承鑑（星火成員）：当时仓库里不是没有粮，而是这个粮不能动。为什么不准动呢，因为农民饿死的现象虽然大面积爆发，上面根本视而不见，他还说农民有粮食，你这个农民把粮食藏起来了，还要刨地三尺1959年年底，就到农民家里搜，把那个枕头，几十年，几代人用的枕头把它扯破。里面都是蓖糠、荞麦，麸皮、乱七八糟做枕头，撒的到处都是，地下刨的坑，炕面前刨的坑，一粒粮也没搜出来。实际上干部知道不知道？都知道，没有粮。可是这个消息是一级瞒一级。

倉庫に食糧がなかったわけではない。その食糧を動かせなかったのだ。なぜか？農民の餓死は爆発的に広がっていたのに、上層部の目に入らなかった。農民には食べ物があると言いつつ、農民は食糧を隠していると、59年末には地面を掘り返したんだ。農家の家宅捜査をして、何十年も何代も使った枕を破って、蕎麦とかゴミみたいな中身を検め、そこら中にぶちまけた。地面には穴を掘り、オンドルにも穴をあけたが、食べ物なんて出てこない。ホントは知っていたんだ 食糧はないと。各部署で隠して上層部に伝わらなかった。

30

蘭州大学教授の江献国が語る。

江献国 兰大教授：当时甘肃省从张仲良下来一条命令，凡是写信到北京，写给国务院、写给党中央、写给毛主席的信一律拆开检查，凡是信里有反映甘肃省饿死人、吃不饱的这种写信人，抓到监狱里，据说抓了一千多投到监狱。

甘肅省では張仲良から命令が下った。北京への手紙は、國務省・党中央・毛主席あては、すべて検閲せよ、手紙内で餓死者に言及していたら、その手紙を書いた者を投獄せよと。噂では1000人以上が投獄されたという。

蘭州大学教授の女性がコメント。

兰大教授：宁愿人吃草，不让红旗倒，当时的口号，简直不得了。

「草を食らっても紅旗を倒させず」すごいだろ、当時のスローガンだ。

31

星火のメンバーの向承鑑が語る。

向承鑑（星火成員）：張忠良は甘肅省第一書記，他在八屆八中全會，就反彭德懷的時候，是遞升為後一名中央候補委員，最後一名中央候補委員，我記得很清楚，沒有一點含糊，他就升官了。

張仲良というのは甘肅省第一書記だ。彭德懷を批判した第八回八中全會で、中央委員候補の最後尾まで昇った、最後尾の中央委員候補だ。はっきり覚えている。出たんだ。

32

マイクロバスの中で農民らしい男性が歌う。周囲の人は「もういい、もういい」と。

唱紅歌歌詞：北京的金山上光芒照四方，毛主席就是那金色的太陽，多么溫暖，多么幸福，把我們心兒照亮。

北京の金山に四方を照らす光、毛主席はあの金色の太陽。かくも暖かく、かくも幸せに、私たちの心を照らす。

33

星火メンバーの向承鑑が語る。

向承鑑（星火成員）：就在武山县向西走，在陇西跟武山之间，有个叫做鸳鸯镇，这个地方就暴发了一个所谓农民暴动，什么暴动呢？就是到粮库里面抢粮，蹦蹦跳跳抓了以后，叭叭叭枪毙了好几个。

武山から西へ隴西と武山の間に鴛鴦鎮という所がある。ここで農民暴動が起こった。何の暴動かというと、倉庫を襲って食糧を盗ったんだ。ドヤドヤと捕まった後、パンパンパンと何人も撃ち殺された。

34

『星火』1号、向承鑑「当面する情勢と我々の任務」を監督が朗読。

《星火》一期《目前形势及我们的任务》作者 向承鑑：由于当代统治者推行各种各样反动政策，工农业生产已遭到各种毁灭性的破坏，由于所谓的党性代替了个性和人性，而实际上强赐人民的奴性，人与人之间的关系到了空前虚伪的程度，由于变化无常和没有法制，人民基本人权被剥夺，每时每刻遭受着生命危机。

現在の統治者の色々な反動的政策により、工業農業の生産は壊滅している。「党性」が個性や人間性にとって代わった。これは人民の奴隷性を強化した。人間関係の虚偽性は空前絶後なほどだ。変化が激しく法治もないため、基本的人権は剥奪され、1分1秒にも生命の危険が迫っている。

35

向承鑑と胡傑監督の対話。

向承鑑：1959年10月份，我正好有一次机会，我有一次出差的机会，我到北京买了菌种之后，我到了天津到了保定、石家庄、邯郸、郑州、风陵渡这些地方我下车了，西安这些地方我都下车了，因为车站是窗口，全部是逃荒的、奔亲戚、要饭这样的人，拖儿带女到处一样。并不是甘肃一个省的情况。这个时候我就有一个基本结论：饿死人的情况全部是政策造成的，是中共中央，是毛泽东造成的。我得出这个结论。我了解的情况多啦，广东、广西、云南、贵州、就四川我不了解，安徽、河南严重的不得了，和甘肃一样。在太原我跟我哥哥有一个大辩论，我把底下情况我跟我哥哥说了，哥哥就害怕我出问题，我哥哥说：你看看太原都是高楼大厦，在党的领导下取得多么伟大成绩，你怎么就看不见呢？我跟我哥哥说：哥哥，你看你弟弟眼睛瞎了没有？没有吧，眼睛很亮的，我说哥哥看到的

向承鑑：1959年10月に機会があって出張することになった。北京に菌種を買いに行った。帰りに天津・保定・石家荘・邯鄲・鄭州—風陵渡などにまわった。西安でも降りてみた。駅は各地の窓口だ。逃散した者・親戚に頼る者・食糧を探す者—子連れの者—こういう人ばかり。甘肅だけじゃなかったんだ。それで私はある結論に至った、餓死者は全く政策がもたらしたのだ、中共中央・毛沢東がもたらしたのだと。そういう結論に至った。多くの地方の状況を知った。広東・広西・雲南・貴州だ、四川だけ知らない。安徽・河南は甘肅と同じでひどかった。太原で兄と議論になった。地方の状況を兄に話したんだ。兄は私が事を起こさないかと心配し、「太原を見てみろ、ビルが建っている。党の指導でこんな偉大な成果を得た。おまえにはそれが見えないのか」と。兄に言

我都看到了，但是有一点，我看到的哥哥没看到。这就是我们的差距。回来以后，基本上那个时候我已经确定了为真理献身。没话说了，已经这样确定了。

胡杰：我看你这个文章上写，延续的苦战，农民恨之入骨，他们的情绪是跃跃欲试，一触即发，实际上小规模

的农民暴动已满地星火了。这是你当时写的文章。

向承鉴：你这是从哪儿来的？有这个吗？
胡杰：是啊，这就是叫《张春元、苗庆久右派反革命集团案》，这个叫结案报告。这是你当时的：我们反对那腐朽透顶而自己标榜英明伟大的所谓共产党现政权，并矢志不移的为彻底的毁灭它而奋斗。

向承鉴：我当时因为我豁出来了，我真正豁出来啦。

36

『星火』2号、何之明「政治優先について」を監督が朗読。

《星火》二期《论政治挂帅》作者 何之明：所谓政治挂帅，就其内容来说，首先便强调党的所谓的绝对领导，任何地方，任何部门都要有党来发号施令，党组织包办一切，国家权力达到前所未有的集中，国家权力达到前所未有的集中，在政治上、思想上、经济上各个方面实行了绝对的法西斯统治。与此相适应的是所谓的书记挂帅，一切事情都归书记管，书记的话被封为金科玉律，而集体领导被抛到九霄云外，书记成了实在的土皇上。

37

星火のメンバー譚蟬雪が語る。

問：林昭是怎样认识张春元的？

譚蟬雪（星火成员）：孙和他妹妹和林昭是同学。结果孙和以她妹妹孙复的名义给林昭写了一封信，林昭就马上回了信。同时还寄了她的《海鸥》，孙和很自然的就告诉了张春元，张春元得到这个信息以后，当时他觉得非常有必要要和林昭取得联系，因为林昭的背后就是《广场》。当时张春元也急于能够和《广场》取得联系，但是苦于没有这个线索。

った「僕目を見てよ、目は光っているでしょ？ 兄ちゃんが見える物は僕も見える。でも僕に見える物は兄ちゃんには見えない。それが僕たちの違いだ」。太原から戻って、もう決めていた、真理に殉じようと。それしかない決めていたんだ。

胡傑：あなたの文章には、こうある一苦役の連続で農民は骨まで恨んでいる。彼らの怒りは一触即発、暴動は“星火のように”拡がっている。これは当時書いたものですね。

向承鑑：君はそれをどこで見た？ 持ってるのか？

胡傑：『張春元・苗慶久右派反革命事件』です。これは判決報告書です。これは当時のあなたの発言ですね。「我々は反対する、腐れきった現政権に、腐っているのに偉大だと自称する共産党に。その壊滅のために徹底的に戦いぬく。」

向承鑑：当時は死に物狂いだった、本当に捨て身だったよ。

「政治優先」は内容的に見て、まず党の“絶対的指導”を強調する。とこのどんな部署でも党からの指令が来る。党組織が全てを行なう。国家権力がかつて無いほど集中する。政治・思想・経済におけるファシズム統治、これにふさわしいのが“書記の指導”だ。全ての事に書記が関わる。書記の話は金科玉条となる。かくて集団的指揮は雲散霧消だ。書記が現地では事実上の皇帝となる。



問：林昭が張春元と知り合ったのは？

譚蟬雪：孫和の妹は林昭と同級だった。孫和は妹名義で林昭に手紙を書いた。すぐ返信が来て、林昭の『海鸥』も同封されていた。孫和は当然ながら張春元に話した。張春元はこの情報を知って、林昭と連絡を取る必要があると痛感した一林昭の背後には「広場」がいたからだ。張春元は「広場」と連絡を取りたがっていた。ただツテが無くて困っていた。

38

資料映像と胡傑監督によるナレーション。

胡杰：这里所说的《广场》是1957年北京大学学生，在519民主运动中，自发印制的一本刊物的名字，它集中反映了北大学生对社会问题的深刻思考。在1961年10月，林昭写到：秉承着北大以及“广场”传统的影响，我很重视对外地、外校的联系，顾雁他们本来早就邀请我去西北，从主观上来说，我是代表“广场”去思考某些问题的。

胡傑：ここで言う「広場」とは、1957年に北京大学学生が5.19民主運動において自費出版した雑誌の名前である。そこには社会問題への彼らの深い考えが窺える。1961年10月に林昭はこう書いている。「北京大学と『広場』の影響を受けて、私は学外との連繋を重視した。顧雁らは私を蘭州によんだ。主観的には、私は『広場』を代表して考えようとした。」

39

譚蟬雪の話に戻る。

譚蟬雪：所以一知道以后，马上张春元就直接去（上海）找到了林昭就不是写信的问题。找到林昭以后，当然大家就谈了，谈了以后，林昭觉得大家都有共同语言，有共同的思想感情。当时她就她的《普洛米修士》那一篇东西，当面交给张春元。

そうと知って、張春元は林昭に会いに上海へ行った。手紙に書く問題じゃない。林昭に会って話し合った。林昭は互いに共通の言葉を持っていると思った、共通の思想・共通の感情があると。林昭は自作の詩『プロメテウス』をその場で張春元に渡した。

40

イメージ映像とともに、林昭の詩『プロメテウス受難の日』全368行の一節を監督が朗読。

胡杰：林昭の長詩《普洛米修士受難の一日》，全長有三百六十八行：
阿波罗的金车渐渐驶近，
天边升起了嫣红的黎明，
高加索的峰岭迎着朝曦，
悬崖上，普洛米修士已经苏醒，。。。。。
娇丽的早晨，你几时才能，
对我成为自由光明的象征。。。。。
钉住的镣链像冰冷的巨蛇，
捆得他浑身麻木而疼痛。
镣铐的边缘割碎了皮肉，
岩石的锋棱磨烂了筋骨，
大地上那锈色的血痕，
勾勒出受难者巍然的身形。



アポロンの金車が次第に近づき
天に赤い黎明がのぼった
カフカスの峰々は朝焼を迎え
崖の上でプロメテウスは眠りから覚める
……
麗しき朝の光よ お前はいつ—
私にとって自由の輝きの象徴たりうるか
……
鎖は冷たい蛇のごとくまとわり
彼の全身はしびれ痛む
鎖は皮を破って肉に食い込み
岩のような凹凸は骨まですりつぶす
大地に転々と続くドス黒い血痕は
受難者の姿を聳え立てる……

41

譚蟬雪が林昭について語る。

林昭开始不太同意办这个刊物。她有这两个理由，一个呢，你秘密的来印这个宣传品，不仅对写和印的人是个冒险，而对于读的人来说同样也是个冒险，那么还要考虑，我这个印的宣传品出去以后，能给人家一点什么东西？值不值得冒这个险，如果你写的都是些尽人皆知的道理，那就不值得去干。但是反过来林昭她又说，是作为交流思想、扩大影响、团结同志，特别是在彼此分散不能自由行动的情况下，那么出版《星火》是启蒙工作必不可少一步。

林昭は初め刊行に賛成ではなかった。それには2つの理由がある。まず秘密でこれを印刷すると、執筆者と印刷者に危険だけでなく、読者にも同じく危険だ。それにもう1つ、これを印刷して人に何を与えられるのか？ リスクを払う価値があるのか？ 誰でもわかっている話なら、わざわざ書くまでもない。しかし林昭はこうも言った。考えを交換して、影響を拡げて団結しあうために、特に分散して自由に行動できない状況では、『星火』は啓蒙に欠くべからざるものだ。

42

胡傑監督によるナレーション。

林昭就在《个人思想立场回顾与检查》这一文中，谈到对兰大这些伙伴的评价。她是这样说的：大约黄土高原上比之金壁辉煌的北京城内是辽阔而犷悍，兰大的朋友们性格相当开朗而外向好动作，却不甚好静去深思，这当然与客观环境有很大关系，似这种好动的习性用以造反，长处是颇富于进取，短处是不善于等待。

林昭は《個人の思想的立場の反省》という文で、蘭州大の友人への評価を、こう書いている。「たぶん黄土高原の方が、きらびやかな北京より広くてたくましい。蘭州大の友人は明るくて外向的で行動的、じっと考えることを好まない。これは客観的環境と関係する。こうした行動力によって造反すると、先取的なのは長所だが、待てないのが短所だ。

43

譚蟬雪が林昭について語る。

林昭在这篇文章里反映出一个什么思想，她不是说绝对要跟共产党对干，没这个意思。她说：我是站在民族、祖国立场上，你只要做的事情对祖国对人民有利，我照样信奉你。但是反过来，当你做的损害这个时候我当然要反对你。你那个时候做的事情实在是与情、与理、与法都讲不过去。所以就引起了她的反抗。她就承认，我现在是要反抗。但是我有一点，只要你现在改变了，你走到好的一边来，我仍然相信你，我仍然会走到跟你合作的道路上。她自己说的很清楚。她说，作为一个爱祖国爱人民的青年，我的责任得尽一切可能，热情赞助和实地促成党的治政民主化，从国家利益民族利益出发，确认党的领导，进行诚实的工作，以求和众人一起努力推进社会生活，使之不断出现新鲜蓬勃开朗的局面。

彼女は何を言おうとしているのか？ 共産党と絶対的に対立しようというのではなく、そういう考えはない。「自分は民族と祖国の立場から、祖国と人民の利益を思ってやることなら、共産党を信奉する。だがその逆に、損害を与えるなら当然反対する。」当時の状況は実際一情にも理にも法にも合わない。だから彼女は反抗した。彼女はこう認めている—「今は反対するが、もし党が変わりさえすれば、もし良い方向に歩み始めれば、以前通り信じられる。党と道を同じくできる」。彼女ははっきりそう認めていた。彼女は「国を愛し人を愛する青年として、自分の責任は可能な限り一党の民主化に協力し促進させること。国と民族の利益から出発し、党の指導を確認しつつ、誠実に仕事をして人々とともに社会を前へと進め、たえず新鮮活発にさせることだ」と考えていた。

44

『星火』1号、張春元「人民公社を論ず」を監督が朗読。

《星火》一期《论人民公社》作者 张春元：把农民用军事组织形式编制起来，加强统治，扼杀和堵塞农民的迁居就业外出谋生的起码要求和道路。在人身自主和自由方面没有丝毫的权利，给农民戴上了无形的枷锁，烙上了奴隶的烙印。

軍事的組織で農民を編成し、統治を強化して農民の移転や就職など一外で生計を立てる最低の要求と道をふさいだ。自主性と自由の権利は全くない。目に見えない鎖で結わり、奴隷の烙印を押す。

45

譚蟬雪が語る。

譚蟬雪；如果正式讨论《星火》，那是北海道旅馆，那是正式一次会。那个就是张春元、顾雁、胡晓愚、苗庆久、有没有孙和我记不得了。他们几个人在那里就是正式的讨论了几个问题，一个是要不要出一个刊物，当时大家意见是共同的，需要一个刊物，这个刊物的目的就是交流思想、统一认识，这么一个作用。所以觉得非常必要。是定期还是不定期，目前还是不定期，先出着看。这一次应该来说迈开了很重要的一步，也是决定性的一步。那么这次开会散了以后，各自分头写稿。张春元是早就酝酿好了要写什么。回去以后张春元、胡晓愚、顾雁都分别写出来了。

『星火』を本格的に話し合ったのは、北海道ホテルだった。あれが正式な会議だった。張春元・顧雁・胡曉愚・苗慶久—孫和がいたか覚えていない。彼らはそこで幾つか話し合った。まず刊行物を出すべきか。出すべしで一致した。刊行物は意見交換と認識の統一という—それが目的だった。だから必要性が高いと思った。定期か不定期かはとりあえず不定期で一様子を見る。この会議は重要な第一歩だった。しかも決定的な第一歩だ。会議が終わってから、各自執筆に入った。張春元はとっくに腹案があった。彼らは別々に執筆したんだ。

46

星火のメンバー苗慶久と胡傑監督の対話。



問：当初、浮夸风、饿死人大家都要知道，为什么你们要用写文章的形式再来说呢？

苗慶久（星火成员）：这是我们是目睹的事实，但是就归结到苏联国家逼债，就说是自然灾害，是百年不遇的灾害，实际是人祸，所有地方干部都说假话，欺下瞒上。我们写人民公社也罢，写彭德怀正确也罢，都是为了实事求是谈农村的情况，目的想让同学知道真相。

問：餓死や役人のデタラメは誰でも知っていたのに、なぜまた文に書こうと？

苗慶久：それは自分で目にした事実だ。それがソ連の借金追及のせいにされていた。自然災害だとも言われた。百年に一度の災害だと、実は人災なのに。全ての地方幹部がウソを言って騙していた。私たちが書いた人民公社のこと——彭德懷は正しいということ——全て農村の事実に基づいて書いた、皆に真相を知らせるためだ。

47

譚蟬雪が苗慶久について語る。

譚蟬雪（星火成员）：老苗因为参与这个会议，而且老苗当时就承担了，说我们那边有这个条件可以刻。

苗さんは會議に参加したから、その時うけあった、自分の所に印刷できる道具があると。

48

向承鑑が『星火』について語る。

向承鑑（星火成员）：譚蟬雪来了，就跟我们说这个事情，决定办一个刊物，取名就叫《星火》，发刊词她带来了。顾雁写的，发刊词的题目《丢掉幻想，准备战斗》，

譚蟬雪が来て話した、刊行物を出すことにしたと。名前は《星火》。顧雁が書いた序文を持ってきた。序文の題は、幻想を捨てて戦いの準備をせよ、そういう題だっ

私の记忆里是这样的题目，还有一篇是胡晓愚先生写的一篇，叫做：右倾机会主义者——赫鲁晓夫。胡晓愚是我的老师。他是北大化学系毕业，后来就在北大读研究生，研究生又毕业，毕业以后55年调到兰大，是主力讲师，他也是划右，我们一块就到天水去了，这样的情况。他写的这么一篇。林昭的一首长诗，就是《普洛米修斯受难之一日》这是她的长诗。还有一篇好像是《论人民公社》。很显然一期不够，分量不够。只有林昭那首长诗篇幅比较长一些，我一看以后，我当时我就提笔我写了两篇。

49

『星火』1号、向承鑑「当面する情勢と我々の任務」を監督が朗読

《星火》一期《目前形势及我们的任务》作者 向承鑑：反右之后的双反、交心、拔白旗等运动，是反右的继续，这几次运动，将全国人民的精神面貌做了彻底的变革。人民公社化运动实际上是整风、反右运动的必然产物。统治者为了使人民驯服，对人民群众物质的、精神的一切实行彻底的剥夺。使人民依附它，并强迫以军事组织形式将农民编制起来，实行奴隶式的集体劳动。

たと記憶している。もう一つは胡曉愚さんの「右翼日和見主義者—フルシチョフ」。胡曉愚は私の先生です。北京大学化学部の卒業で、北京大で博士に進んだ。大学院を終えて1955年に蘭州大に赴任し、主力講師となった。右派にされていっしょに天水へ行った。そういう状況だった。彼は詩を一首書いた、林昭の詩、《プロメテウス受難日》だった。あとは《人民公社を論ず》だったと思う。明らかに1号とするには字数不足だ。林昭の詩だけが長めだった。私は見てすぐに論文を2つ書いた。

反右派後の“双反”“交心”“拔白旗”運動は全て反右派の続きである。こうした諸運動は全国の人々の精神を徹底的に変革した。人民公社運動は整風・反右派の必然的産物である。統治者は人民をならし服従させようと人々の物質的精神的全てを徹底的に剥奪した。人民を付き従わせようと軍事組織的な形を強要して農民を編成していき奴隷式の集団労働を実行した。

50

向承鑑が『星火』印刷について胡傑監督の質問に答える。

問：当时《星火》是你和苗庆久来刻的钢板是吧？

向承鑑：我也刻了，他也刻了。他可能比我要刻的多，因为在刻的时候我正好要写这篇文章，

胡傑：『星火』はあなたと苗慶久でガリ版を？

向承鑑：私と彼でガリ版をきった。彼の方がたくさんやっただろう。私はガリをきりながら文を書いたから。

51

『星火』1号、向承鑑「当面する情勢と我々の任務」を監督が朗読。

《星火》一期《目前形势及我们的任务》作者

向承鑑：当代统治者在历次运动中都有一个基本的指导思想和做法，以主观臆测代替客观事实和它的没有法制，他使得许多无辜者在心灵肉体上受到重大的创伤，使数以万计的生灵变成了冤魂。由于思想垄断和国家集权，实际就是党的绝对领导的恶性发展，实际就是党的绝对领导的恶性发展，思想方法日益主观迷信，反动变质，已经造成了可悲的结果。

現在の統治者は何回かの運動において、一つの基本的な指導思想と方法がある。主観的臆測を事実や法制度より優先すること、それは罪なき人々の心と肉体に大きな傷を与え、計り知れない命を死霊に変えた。国家権力と思想的専政によるのは、党の絶対的指導の悪しき発展である。マルクスの看板を掲げたある者と政治家たちの思想と方法は主観的迷信と反動へと変質し、もはや悲しむべき結果を来した。

52

甘肅・武山の標識、向承鑑らが当時住んでいた現地の住民との対話。

农民：这里是1958年建成的。

胡杰：那个时候的事你还知道吗？

农民：我58年的事情不知道，我58年还没到这里来。

我是67年来的。下边的房子就是兰州同事住的房子。

胡杰：下面的房子，他们原来在这里住过。

农民：还有后面的土房子。

農民：ここは1958年に建った。

胡傑：当時のことを覚えていますか？

農民：当時のことは知らない。1967年に来たから。

下の部屋は蘭州の連中の部屋だった。

胡傑：彼らは下の部屋に住んでいたんですね。

農民：後ろの倉にもいた。〔次号につづく〕